
クレイジー!

狂乱者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイじい！

【Nコード】

N7537G

【作者名】

狂乱者

【あらすじ】

主人公は護るため。メインヒロインも護るため。兄は吸血鬼を狩るため。双子は兄のため。殺人鬼は自分の生き方のため。魂は知りたいがため。様々な思惑がシンプルに収縮され、混ざり合う未だに狂人足らずの物語

プロローグ（前書き）

お初にお目にかかります

「狂乱者」と申す者です。

この度は「クレイじい！」に目を通してくださって
ありがとうございます。

未熟で愚かな者ですが、楽しんでいただけたらと思っております。
では、未だ狂人、狂気足らずの物語

「クレイじい！」

どうか、お楽しみ下さい。

プロローグ

あかい
あかい
あかい

目に見える全てがあかい

月はあんなにも白いのに
空はあんなにも黒いのに

ぼくの周りなあかい
あかい
あかい

だけど、黒くなっていく
なんだか、すごく眠い
ねよう。すごく眠い

「おや……こ……は……」
……？
だれ？

大きい人
ぼくよりもずっと大きい人

「……下さい……私……吸血鬼……」
きゅうけつぎ……？

第一話「主人公の日常は唐突に崩壊する」

「黒坂 康介」

性格は温暖で優しい。

だが、一人称は「俺」

両親は現在、長期海外旅行で居ない。

幼少期に親戚宅に預けられる。

定期的に口座に金は振り込まれている。

幼少時に起こった事故で「血、殺人」にトラウマあり。

また、その事故で預けられていた親戚宅から隣町から引越し。

元々、住んでいた家に現在、住んでいる。

現在は一人暮らし。

幼馴染に「夢野 香奈」という人物が居る。

「夢野 香奈」

性格は温厚で優しい人物。

大企業製薬会社「ユメノ」の社長の一人娘。

現在は社会を知るという意味で、親は本社のある街に移動。

この街で一人暮らし中。

どうしても困った時にのみ、親の力を借りるようになっている。

幼少期に越してきた「黒坂 康介」と出会い、信頼関係を深める。

未定。不定。未確認。情報未だ集まらず。

視認しか出来ない。当然だ。

記憶は見られない。そうそう便利ではない。

仕方がない。集めよう。情報を。効かない理由を探るために。

日常の朝

あえて言うけど

最近、何か、この街は可笑しいと思う

この「小之宵街」は

別に、俺の頭が狂っている訳じゃないけど

何処か「変」なんだ

何処か判らないけど・・・

「あ！ 康介〜！」

明るい声が朝の坂道に響く。

茶髪でロングヘアの美少女が息を切らしながら駆けてくる。

平均的な体つき故に、とある一部分が異常に揺れたりはしない。

騒がしい……騒がしいよ。香奈……

「はぁ……はぁ……なんか、最近……はぁ……はぁ……はぁ……いつもより

……はあ……疲れるね……」

息切れするくらいなら、走らなければ良いのに……

「夢野 香奈」という名の美少女は肩で息をしながら、目の前の男
「黒坂 康介」に対して顔を上げ、笑みを向ける。

学校指定の制服を着ている彼女はとても可愛らしく、クラスでも
男女ともに評判が良い。

「おはよう！ 康介！」

「ああ。おはよう」

元氣一杯の挨拶だが、香奈の顔には、何処か疲れが見て取れる。

「大丈夫？ 何か、いつもより疲れているみたいだけど……」

不安に思った康介は、心配の意味合いで、そう尋ねる。

香奈の表情は笑顔で埋め尽くされているが、その奥に潜んでいる
「疲れ」を幼馴染である「康介」は見逃さない。

「え？ あ……バレちゃった？ 最近、何か調子悪いんだ……」

笑みを崩し、少し青ざめた表情に戻った香奈は、そう告げる。

「無理しちゃダメだよ？ 学校でも調子悪かったら、言っつてよ」

香奈の幼馴染でもある康介は、下心一切無く、言う。

その言葉に香奈は感謝しつつも、「平気」という意味合いの返事
をする。

「だ、大丈夫だよ。このくらいなら」

“元氣”であると、笑顔を再び顔に宿す。

だが、その表情はやはり辛そうな様にも捉えられる。

「むう……香奈がそう言うなら良いけど……」

康介は洪々と香奈の空元気に付き合いながら、自分達の通う高校
へと向かう。

朝の日差しは二人を照らし、晴天は二人を見守る。
風は寒くない程に吹く。
雀は仕事の様に、朝のBGMの様に鳴く。

日常の放課後

「それじゃあね〜」

一日中、ダルそうだった香奈を見送りつつ、康介はお互いの家へと続く分かれ道で香奈と別れ、自宅への道を歩む。

そんな康介の表情には不安が覗える。

「本当に大丈夫かな……香奈の奴。今日は一日中、ダルそうだったけど……」

そんな独り言を呟きつつ、西側に広がる森に隠れつつある夕日を見て、寒くなりそうと感じた康介は早々に自宅へと足を向ける。

駅を挟んで、東側に存在する住宅街への道を通って。

「しかし……見れば見るほどに不思議な街だよねえ……」

ふと、疑問に思った事を口に出してみる。

あまりに自然過ぎて気にも止め無い事だが、この「小之宵街」このよいがしは実に不思議な作りになっている街だ。

駅を挟んで東側には高層ビルや住宅街が並ぶ。

反対の西側には、森が生い茂っている。

西側の駅近くには商店街が立ち並んでおり、娯楽施設なども全て揃っている。

“人間の欲望”と“自然”をすべて凝縮したような作りの街である。

だが、この街に住む者は、そんな事は疑問にすら思わない。それが“常識”だからだ。

それは人間が酸素を吸って生きているという常識と同一化されている。

だから、この街の作りを疑問に思うのは中学生時に哲学的な事を考え始めた時。

唐突にこの街の作りを不自然に思った時。

後は、引越して来た人がそう思うくらいである。

康介の場合は、唐突に思いついただけである。

唐突ゆえに、すぐにどうでも良くなり、考えるのをやめる。

「まっ、どうでも良いか……」

そこから十数分後

「おう……？ 一体、どうなってるんだ……これは？」

後ろに飛び、赤錆びた鉄骨を左手に持った男が呟く。

右手は鉄骨を左腕で投げた際に捲かれてしまった裾を直している。

そんな男の対角線上には、険しい表情をした香奈が震えている康介を庇う様に立っている。

足腰は震え、朝に会った時の様に息も切らしている。

「ああ……。これが噂のアレか。“助けられてしまうフラグ”か。あゝ……。最初は俺の一方的な虐殺かと思いきや。何、ソイツは主人公とも言うのか？ それで、庇うお前はメインヒロインとかか？ おお……。何だ、これは。自分で言ってる、わくわくしてきたぞ……。！ む……。？ だが待て……。この場合だと、俺は“かませ”という事か？ 主人公、もしくはメインヒロインの力を見せ付けるためのだけの。おお……。そいつは腹が立つ。ああ！ そうだとも！ イラつくとも！ 俺は一話だけ登場のかませなのか！ ナウー！ そいつは神が許しても俺が許さない！」

やたらとハイテンションな男は独り言を叫び続ける。

その間も腕をやたらと空中で振り回すために、先ほど、せつかく直した裾が、また捲くれてしまう。

「か、香奈……。！？」

驚愕と恐怖に脳内を支配されている康介が叫ぶ。

香奈は首だけを康介に向け、静かに「逃げて……。康介……。！」とだけ言うが、パニックになっている康介には聞こえない。

「待て待て。簡単じゃないか。こーゆー場合の俺の助かる方法は二つ。一つは“逃げる”もう一つは……。主人公を殺害するという事だな！！」

男は動きまわしていた腕を止め、左手で持っている鉄骨を思いっきり投げつけるモーションに入る。

そして、言葉通りに思いつきり赤錆びた鉄骨をぶん投げる。

鉄骨は素直に、香奈の後ろで泣きそうになっている康介の顔面を掛けて飛ぶ……。のだが、それを、表情が一瞬だけ冷徹になった香奈が素手で叩き落とす。

「！？」

「おおう」

康介と男、全く違った反応を見せる中、辛そうな表情へと香奈が

戻っていく。

「確かに確かに確かに確かに……やっぱりこうなるのか？ そうであるう。こんな場面に出てくるメインヒロイン故に。只者の訳ないな。さっきの一撃を弾き返されたのも、こーゆー訳であつたのか」

喜々とした男は近くにあつた鉄骨を、左手でひょいと持ち上げる。それこそ、赤ん坊が積み木を軽々と持ち上げるぐらい簡単に。

香奈は、その行動を見て、目つきを鋭くして、叩き落した鉄骨を両手で拾い上げる。

「も、もう……訳が分からないよ……！」

驚愕のみが続く康介の脳内は、完璧に混乱していた。

誰が予測出来ようか。

康介の未来を。

香奈の未来を。

未だ見えぬ登場人物たちを。

彼らはまだ知らない。

自分たちの“日常”が壊れていくのを。

狂気はゆっくりと浸透してしまった。

既に遅い。

第二話「メインヒロインは嬉しさの余り歓喜する」

非日常に片足を突っ込んだ夜

十数分前

「寒いなあ……………」

もう冬になりつつある夜空の下、康介は足早に家に向かっていった。その途中、家の近くにある空き地を通り抜けようとしたのだが……

「おお…………不幸だな。今夜のお前は非常に不幸だった。うん。これで片付けてしまえ」

空き地の暗闇の中から、男の声で、そう聞こえた。

「は…………？」

康介の不思議そうな声が、闇に響いた瞬間。

風を切って、何か巨大な細長い赤い物が康介の横を通り抜けた。

「へ…………？」

横を通り抜けた細長い物は、向かい側にあったコンクリートブロックの塀に突き刺さる。

暗闇でも、その細長く赤い物の正体は分かった。

鉄骨である。

赤錆びた鉄骨。

あのビルやら巨大建築物やらを構造する際に必須アイテムの鉄骨。鉄の骨、で、鉄骨。ラーメンに入れる事すら出来ない骨。

「……………」

既に理解出来ない。

何が起きたというのか。

自分は普通に日常生活を送っていただけなのに。

何故、唐突に、鉄骨を投げられなければいけないのか。

訳が分からない。

「やはり初発は外すべきだろう？ 何処の悪党も初発では殺さないさ。ああ、そうさ。本物の悪党は初発で殺すが、俺が見て育ってきた悪党というのは小説やアニメ、漫画の中の悪党さ。そーゆー奴らは初発では絶対に殺さないのさ。これ、常識」

そう言っつて、闇の中から出てきたのは黒髪ロングで紅い瞳の人物。服装は何処かの工場の作業着を着ている。

本来は青色なのだろう。所々に青い部分見られる。が、その男が着ている作業着は赤黒く染まっていた。

男。驚愕で全く動けない康介に対して、ゆっくりと歩いて迫ってくる。

「久々の殺人だからな。実に、いや、実に気合いが入る。何、此処暫くは溜まっていたアニメを見ていたんだ。本当にすまなかったな。ん…………？ 俺は今、何故、コイツに対して謝ったんだ？ ……訳が分からない。まあ、仕方あるまい」

何…………？ 何が起こっているんだ…………？

脳内での処理が全く追いつかない状況で、康介が出来る事は、た

ただだ、震える事のみ。

「おお。震えているぞ。実に普通の反応だ。いや、実にお前は平凡だ。恥じる事など何も無いぐらいに。グウレイト。グツジョブ。スンバラシイ。だな」

よく見れば、左手に先ほどと全く同じ形状の物体を持っている。それが自分の背後の壁に突き刺さっている鉄骨と同じだと気付くのは、そう難しくなかった。

というより、それこそ最初に気付くべき点だったのだが。

「ではでは。二撃目こそは当てよう。お前にいつまでも恐怖を与え、訳にはいかない。実に俺は優しいな。いや……殺人を行う時点で悪人か。すまない。俺は悪人だった。一瞬でも、安楽死を期待したのであろう、お前には非常に申し訳ない。だから、俺は謝ろう。……おお。ようやく、お前に謝る理由を見出したぞ！これで先ほどの謝罪の理由も納得でき……ないな。さっきのは過去の出来事。だが、今のはさっきより未来の出来事……むう。やはり理解できんぞ」

右手を顎に当て、左手に持った鉄骨の先端を地面に突き刺し、考え込む男を前にして、康介の取った行動は

に、逃げる……！！

だが、気付かれないようにと、慎重に男から距離を取る。しかし

「おお。逃がすところだった。もう面倒だから考えるのはやめにした。死ね」

不条理に、男が地面から先端を引っこ抜き、振り上げた鉄骨が康介の頭上に迫った。

そんな走馬灯が見えても可笑しくない状況で、康介の視界の隅には、男の背後にあった鉄骨の山が見えた。

何処の工場だよ……こんな空き地にこんな物を置いといたのはさ

……

半ば、生きる事を諦めたが故に、思いついた一言だった。

そして……

先ほどの場面に戻る。

「対峙するか。それもまた一興。されどされどされど。殺人鬼を相手にして生きて帰る自信はあるのか？ 無ければ言おう。ただただ一言だけ言おう「帰れ」と。お前単体ならば、逃げるのは非常に簡単だろう」

饒舌な男に対し、香奈は無言で男を睨み続ける。

息を切らし、全身は震え、両手に持った鉄骨が似合わない少女。

その少女の答えは「いや」だった。

そんな少女の答えに、男は予想していたかの様に狂った笑いを浮かべ、言葉を返す。

「オーケー。では、殺そう。それはそれは饒舌に語りながら殺そう。今まで、お前の様な“化け物”に、俺は出会った事が無いからな。ひたすらに、息もつかぬまま、ただただ、喋り続けながら殺そう」

その言葉の語尾で、男は駆け出した。

その速度は尋常ではない。
重い鉄骨を持っている事もそうだが、既に「人間」じゃない。
康介の脳内では、その事のみが理解できた。

「では、死ぬ。生きていたら、更に喋り続けるが。まずは小手調べだ」

矛盾した言葉を喋り続けながら、男は暴力に任せた斜めからの一撃を片手で繰り出す。

それを先ほど叩き落した鉄骨を拾い、両手でしっかりと持って、受け止める。

一瞬、激しい火花が二人の間の暗闇を照らす。

「おお。素晴らしい。そうでなくては。……すまん。今の「そうではなくては」は使いたかっただけだ」

そう言い、空いている右手で拳を作り、香奈の腹部目掛けて放つ。両手で男の鉄骨の一撃を防いでいる香奈には、その拳を防ぐ手段など無かった。

鉄骨ほどではないが、凶暴な一撃を腹部に喰らう香奈。

「ッ……!!」

苦痛で顔を歪ませるが、怯まず、鉄骨をそのまま前に押し出す。

「凄まじいな！ 女が俺の一撃を受けても立っていらうべらっ!？」

前に押し出す事によって、競り合っていた男の鉄骨は、男の手から離れ、顔に直撃する。

不意打ちともいえる一撃を受けた男だが、前のめりに倒れこむ事はせず、顔で鉄骨を受け止めていた。

その際に、香奈は鉄骨を手放し、蹴りが男の腹部に仕返しといわんばかりに叩き込まれる。

「おぐっ！」

怯み、醜い声を出している男の隙を見て、背後にずっと立っていた康介の手を取って、走り出す。

「康介……！ 来て！」

「え？ わ、わわっ！」

強力な力に引っ張られ、康介も走り出す。

また、腹部に蹴りを喰らった事により、男は仰向けに倒れ込んでしまう。

もちろん。顔面で受け止めていた鉄骨は、そのまま男の顔の上に倒れ込む。

「あべっし！」

そんな男の虚しい声が遠さかっていく康介の耳に届いた。

「はあ……一体……どう……なってる……のさ！」

街頭と月明かりのみが頼りな静寂な空間。

虫たちは夜に鳴くのをやめ、家の明かりも何故か付いていない。

そんな空き地から少し離れた道端の隅で息を切らしながら、康介は叫ぶ。

常人の反応であろう。

対する香奈は息切れこそ起こしているが、康介ほどではなかった。

「ごめん……私も、アイツについては全く知らない……とりあえず説明出来るのは、私自身の事だけ」

そう言っつて、康介の顔と向き合った香奈の瞳は紅い。

「あれ……？ 香奈……瞳の色って……紅かったっけ……？」

その言葉に気まずそうに顔を逸らす香奈。

しかし、そうしていても始まらないので、顔を再び康介に向け、香奈は静かに語りだした。

自分自身の事を。

「康介……実は私……「吸血鬼」なんだ」

「……え？」

幼馴染の衝撃発言。

完璧に、今度こそ完璧に。

康介の脳内は混乱に、パニックになった。

「家系全てが「吸血鬼」で……私は「人間になれる」吸血鬼なんだ

……」

「は……はあ……」

顔を俯かせながら喋る香奈だったが、康介は驚愕を通り越して、どうしていいのか分からなくなっていた。

理解不能。理解不能。

「ごめん！ 今まで黙ってて……ただ……康介に知られて、怖がられるだけは嫌だったの！ で、でも……今日、嫌な予感がしたから、康介の家に行こうとしたら、康介が襲われて！ それで、それでつい！」

遂には涙が出て、顔を両手で押さえてしまう。

そんな香奈を見て、最初こそおろおろしていた康介だったが、一つだけ分かった事がある。

ん……？

ああ……何だ。分からない事だらけじゃないみたい。

「じ、こんな私なんか、怖いよね？ 嫌だよね？ じ、ごめんね……」

泣き続ける。

幼馴染は泣き続ける。

自分の初めての友人にして「想い人」に自分を拒絶されるから。しかし、香奈にかけられた言葉は、棘のある言葉ではなかった。

「大丈夫。香奈が吸血鬼でも、俺は香奈から離れたりしないよ。だって、吸血鬼って分かってても、香奈は香奈だから」

笑顔で。

そう笑顔で答えた。

「こ、康介……康介え……！」

涙でくしゃくしゃになった顔のまま、康介の胸に飛び込む。

「うわっ……と……大丈夫だよ。大丈夫だから」

そのまま香奈を抱きしめ、包み込む。

康介の腕の中で、幼馴染で吸血鬼な女の子は泣いている。

だけど、その涙は悲しさだけではなく、嬉しさも混じって……

と、このまま続けば、結構いい話で終わるのだが。

ふと、遠くの地面のコンクリートが叩き割れる音がした。

「……!?」

音に驚き、すぐさま離れる二人。

音は遠いが、定期的に聞こえてくる音は、確実に二人に近づいてきた。

「さっきの奴……!?」

すぐさま、先ほどの恐怖が思い出される康介。

香奈は音のした方を振り返って見ていたが、すぐに何かを決意し、

向き直る。

「あ、あのね。康介。先に謝っておくね。ごめん！」
振り返った顔は赤く染まっており、非常に可愛らしかったのだが、この場には最も相応しくない顔である。
その事に康介が疑問を持った、次の瞬間

康介の唇に香奈の唇が重なった。

甘い香り。

女の子特有の香りだ。

だが、今はそれよりも唇にあるこの感触。
柔らかい感触が心地よかった。

「!?!?!?!?!」

今日の中でも一際違った驚きを味わいながらも、康介の唇から香奈の唇が離れていく。

「これで康介に、「私の力の一部」が渡ったはずだよ。これで、康介もアイツと闘えるはず！」

「え……ええ!?!」

驚愕は続く。

今日は康介にとって、最も驚く日であった。

第三話「殺人鬼は饒舌に語る」

非日常に片足を突っ込んだ夜

「一度逃げ、その後、すぐに再会……運命ではなく、必然性をひしひしと感じる俺がいるぞ。だが、お前たちの未来は、そう。決まった。俺と対峙した時点で「死」だ。何故ならば、俺が「殺人鬼」だからだ。これは覆しようのない事実。別に、覆す必要もないのだが。いや、実に素晴らしいぞ。主人公とメインヒロインを「かませ」である俺が殺すのだからな。ああ……？今の言い方だと、自分自身を「かませ」と認めた事に……おお……何と言う事だ！ ショックだ！ 自分自身にガッテム！ シェットだ！」

暗闇の奥から、電灯の灯りに照らされ、姿を現した「殺人鬼」は相変わらずの言葉を喋りながら、両手に持った鉄骨を頭上でぶつけ合い、音を出し続ける。

夜の住宅街に相応しくない金属音が鳴り響く。

相対する香奈は緊張の面持ちである。

いかに「吸血鬼」といえど、香奈は普通の女の子。

そんな彼女にいきなり殺人気を倒せというのだから、緊張もする。

というか、緊張だけで済んでいるのは、一重に彼女が「吸血鬼」だからだろうか。

背後にいる康介の喉が鳴る。

つい三十分前までは、日常を過ごしていたのに、僅か三十分で、彼の日常は崩壊した。

日常に帰りたいという願望が、康介の中で膨らんでいた。

しかし、香奈をこの殺人鬼に立ち向かわせる訳にはいかない、という気持ちも強かった。

「おおおおお……って……来ないのか？ 何だ何だ何だ。来ないのか？ 暇で暇で仕方がないのだが。というか、お前たちが何か喋るのをずっと待っていた訳だが、この場合、この状況なら普通「私が主人公を守るんだから！」とか、メインヒロインが言うシーンじゃないのか？ 違うのか？ だとしたら、俺は今、とんでもなく恥ずかしい事を言った事になる。ああ……最近、ついてない事ばかりだな。煩い声が身体の内部からするし。これも一重にあれだ。殺し足りないからか？ ……おお。今の台詞は何か、殺人鬼っぽかったな！」

一人で勝手にハイテンションになりながら、殺人鬼は鉄骨をぶつけ合う速度を速めていく。手を動かす速度が異常になり、金属音も既に、一つの音として聞こえる。

そんな中でも、香奈と康介は殺人鬼の行動に目をやる。いつ襲ってくるのかを見定めるために。

正直、康介の方は死にたくないから。なのだが。

と、そんな中、音が止む。

殺人鬼は腕をぶらんと下げ、その紅い二つの瞳で、康介と香奈を見つめる。

「……つまらない。つまらないつまらないつまらない……！ 喋らないのか！ 喋らないのか！！ お前たちは！！ ああ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：！ だんまりを決め込むのか！ それも良いだろう！ いや、良くない！ ではどうする！？ 殺そう！ それ以外に方法は無い！ 会話が無ければ意味などない！ 恐怖も狂気も見取れない！ それじゃあつまらないだろう！？ だからだからだから殺そう殺そう

殺そう殺そう殺そう！」

語尾で左手に持っていた鉄骨を二人目掛けてぶん投げる殺人鬼。

すぐさま香奈が対応し、右手で鉄骨を叩き落す。

しかし、その隙に殺人鬼は身を屈め、距離を詰め、右手に持っていた鉄骨を突き出す。

避けたら、康介に当たる……ッ！！

咄嗟の状況でも、後ろの幼馴染の事を考え、片腕一本で防御体制に入る。

だが、その程度で止められるようでは、殺人鬼とはいえない。

渾身のとも取れる一撃は香奈を上空に跳ね上げた。

「香奈ッ！？」

ずっと香奈の後ろにいた康介には、何が起きたのか、さっぱり分からない状況だった。

そんな康介が次に感じたのは、腹部に対する激しい痛み。

殺人鬼の蹴りが、香奈を見上げていた康介の腹部に突き刺さる。

「ガッ……！！？」

あまりの痛みに、その場で腹を抱えてしゃがみ込む。

そんな康介の姿を見て、殺人気は非常に楽しそうな笑顔を見せる。

「ようやく喋ったな！ 俺は非常に感動しているぞ！ だからだからだから！ 死んで見せてくれ！！」

突き上げていた鉄骨を、そのまま振り下ろす殺人鬼。

空中に吹き飛んでいる香奈には、成す術は無い。

「康介ッッ！！」

心中で叫ぶが、実際、声となって出ていた。

その言葉が幸運を招くのだが。

香奈の叫びを聞いた殺人鬼は鉄骨を康介の頭上スレスレで止め、
香奈の方を見上げる。

やはり、その顔は笑顔で楽しさに満ちていた。

「そう！ 声だ！ 俺は声が聞きたかったのだ！ んん〜！ これ
が無くては始まらないな！ 世の中は！ そうだろう？ 声があっ
ての人生であり物語でありポエムであり詩であり小説でありアニメ
であり漫画である！ ん？ 詩やポエムや漫画や小説は台詞か……
これは果たして、言葉が奥深いのか。それとも俺がバカなだけなの
か。いや……俺は断じてバカでないと宣言したいぞ！！」
何がしたいのか、理解不能な殺人鬼はそう言って、夜空に向かっ
て叫ぶ。

その隙に、香奈は受身を取り、着地。

すぐさま殺人鬼へと蹴りかかる。

無論。康介と殺人鬼を少しでも離れさせるためだ。

「このッ！」

香奈の飛び膝蹴りを、鉄骨の横薙ぎだけで防ぐ。

いや、防いだのではなく、香奈を道沿いにあるコンクリートプロ
ツクの塀に叩き込んだのだ。

「ッ……！！」

二度の激痛が香奈の全身を襲う。

「そうだ。俺はバカではない。故に、今の一撃を弾き飛ばした。お
お。中々にやるな。俺は。自分自身が素晴らしく思えるぞ」

殺人鬼は珍しく、短い言葉を放ち、右手に持った鉄骨を左手の平
に軽く打ちながら、香奈にゆっくりと近づいていく。

止めを刺しに入るようである。

「おお……さらば。俺の強敵になり得た「怪物」よ。その力量は測

れなかったが、俺以下であった事は覚えておこう。メインヒロインにして化け物。実に悲しい事だ。今度、生まれ変わったら、天使でもなるか、完全な化け物として生きる事をお奨めしよう」

遂に、香奈の目の前まで迫った殺人鬼が、右手に持った鉄骨を振り上げる。

「ま、待てっ！！ 殺人鬼！」

と、情けないとも強い思いが込められたとも分からない言葉が殺人鬼の耳に届く。

振り返ると、そこには、香奈が叩き落した鉄骨を両手で持ちながら、震えている康介が立っていた。

どうやら、香奈に力を分け与えて貰ったために、鉄骨を持てるようになったらしい。

「香奈は……香奈は絶対に殺させなんかさせないっ！」

震える声で、精一杯叫ぶ。

声は虚しく、暗闇に吞まれていくが、殺人鬼の気を逸らすのには十分であった。

「……素晴らしい。素晴らしいぞ！ 貧弱貧弱過ぎる主人公が身を呈して、メインヒロインを守る！ これぞ王道だな！ いや、少し逸れているか……？ まあ、どっちでもいいだろう。良いだろう！ 面白い！ ならば主人公から殺そう！ それもまた一興！ というより、そちらの方が面白い！」

歡喜に満ちた殺人鬼は、康介の方へと歩いていく。

恐怖に支配された康介は、目をギュッと閉じ、殺人鬼へと突進する。

「うわああああ！！」

「最高だ！ 実に最高だ！ 最高に“楽しい”って奴だな！！」

そして、二人の鉄骨が交差する……ハズだったのだが

「って!？」

康介は殺人鬼を目の前にして転倒。

持っていた鉄骨は大回転を繰り返しながら、殺人鬼の真上へ飛ぶ。そんな康介を見た殺人気は、流石に呆れ気味な表情をしていた。

「あ……ああああああ……残念過ぎる才子だろう。そうだろう。俺の楽しみが全て奪われた気分だ。こんな気分の時は、主人公を惨殺して晴らすしかない。そうでなくては、そうでなくては意味がない。あああ……本当に残念で残念で仕方がない。その責任として、あの空飛ぶ鉄骨を主人公、お前目掛けて、この俺が持っている鉄骨で弾き飛ばして、叩き込んでやる」

落ちてくる鉄骨を見ながら、殺人気は自分の持っている鉄骨を振り上げる。

「さらばさらばさらばだ。死んで償ってくれ。俺の楽しみを奪ったことを」

そして鉄骨が振り下ろされ、空中を飛んでいた鉄骨が主人公を貫く……というのが、殺人鬼の予定だったのだが、大幅な変更が本人の意向なしで強制的に行われた。

「させないっ！」

今まで放っておいた香奈の存在である。

吸血鬼ゆえの、回復速度で復活し、殺人鬼の振り上げた鉄骨を飛び膝蹴りで吹き飛ばす。

殺人鬼の頭上を飛び越えながらの攻撃のため、香奈は康介の側に着地する事が出来た。

「……おおう？」

呆気に取られた殺人気。

だが、すぐにそれどころではない事を悟る。

弾き返すための鉄骨は、香奈に蹴り飛ばされ自分の真上には鉄骨。今から回避は不可。受け止めようにも、体勢が体制なだけに無理。では、どうなる？

「おっと」

次の瞬間

殺人鬼の身体を一直線に鉄骨が貫いた。

血飛沫。

膝を付くが、鉄骨が地面のコンクリートブロックに突き刺さっているため、倒れる事が出来ない。

力無く、垂れ下がる両腕。

そして、血、血、血。

香奈は、すぐさまうつ伏せで、未だに起き上がっていない康介を引っ張って、その場を去る。

なお、康介はその時、倒れたショックで気を失っていた。

壊れた「殺人鬼」は笑う。

ひたすらに笑う。

「見つけた」と。

面白い物を「見つけた」と。

これは「殺しがい」があると。

第四話「非日常の開幕」

非日常 その記念すべき一日目

「ううん……？」

黒坂 康介の顔にカーテンの間から入り込んだ日差しが当たる。その光で、康介は目を覚ました。緑色のソファアールの上で上半身を起こす。

あれ……？ 俺は昨日……

自分の記憶を振り返ってみると、殺人鬼を目の前にして、転んだ瞬間までしか覚えていない。

それから自分はどうなったのか？

そもそも、香奈は？

あの殺人鬼は？

そんな事を考えながらも、とりあえず今は、状況判断をしようという結論に至った。

「此処は……？」

何処か、見覚えのある部屋。

テレビにソファアール。

部屋の奥にはカウンター式のキッチン。

俺は……この場所を知っている……？

昔。小さい頃に……

「あ、おはよう。康介」

「ひゃい!？」

いきなり背後から声をかけられ、康介は身を震わせ、みっともない声を出す。

「あはは……驚かせちゃった？」

「え……な、何だ。香奈かあ……って、昨日はあれからどうなったのさ!？」

無事だった幼馴染を見て、安心した康介だったが、先に、昨夜のその後が気になり、香奈の顔ギリギリまで近づいて、尋ねる。

「お、落ち着いて……順を追って、説明するから、ね？」

康介を落ち着かせ、自らもソファーに腰掛ける。

まあ、香奈の鼓動は非常に早まっていたわけだが。

「まずは、昨日のその後から」

「うん」

そう言っつて、香奈は昨夜の出来事を「殺人鬼が死んだ」という事実を「倒した」に変えて、全て話した。

「で、気を失った康介を、私が私の家まで運んだの」

「そ、そうなんだ……ごめん。迷惑かけちゃって……」

落ち込む康介に対し、香奈は首を横に振る。

「それは私の台詞。元はと言えば、あの殺人鬼が悪いんだけど、康介を日常から突き放した原因は私だから……」

と、その台詞で、二人の脳内に「香奈の力を康介に分けた瞬間」が思い出される。

「……………」

「……………」

お互いに顔を真っ赤にしながら、俯く。

それから数分後

香奈は溜め息と同時に、康介に問う。

「それで、康介には話さなくちゃね……私の家系と私の全てを」

その一言で、場の空気が変わる。

康介も香奈も真面目な表情になる。

「私の家系は遠い昔から『吸血鬼』だったの。その血がずっと受け継がれて来てただけ……私の3代前から血が薄くなっちゃって……もう家系の人物の殆どは『人間』になりつつあったんだ……でも」

そこで、一旦、香奈は言葉を区切る。

「突然、私だけ『吸血鬼』の血が濃く、産まれてきてしまったの」

その言葉をただ、康介は聞くだけ。

「でも、不幸中の幸い……なのかな？ 私は『人間』になれる能力を持った吸血鬼として産まれた。だから、普通の人間にも吸血鬼にもなれる生物になっちゃったんだ……」

「自分自身で、その事を認識してたせいか。康介に出会う前までは、誰も心から「友達」って呼べる存在が居なかったんだ……」

「それで、塞ぎこむようになっちゃって……寂しかった。お父さんもお母さんも、殆ど人間だもん。でも、私は「吸血鬼でもあるし、人間でもある、凄く中途半端な存在」なんだよ？ 凄く悲しかった……」

「でも、そんなある時、康介に出会った。康介のお陰で、私は本当の「友達」が出来たし、塞ぎこむ事も無くなった。康介には本当に感謝してるんだ……」

「だからこそ、私の正体を康介に知られたくなかった。絶対に拒否されると思ったから！ でも……でも、そんな私でも康介は受け入れてくれた！ あの時は本当に嬉しかった！」

段々と、涙目になりながら、感情的に話す香奈。

そこで、康介は一言だけ述べる。

「大丈夫。香奈が俺の事を「本当の友人」と思ってくれているように、俺も香奈の事は大事に思ってるから」
笑顔で。

優しい笑顔で、それだけ告げた。

「うう……康介はやっぱり康介だよお！」

流石に昨夜とは違い、感情をコントロール出来たのか。

康介の胸には飛び込まず、右手で涙を拭う。

こんな感じで、二人の友情は更に深まった。
のだが……

「ところで……今日も学校じゃないの？」

「……あ」

一瞬の沈黙の後、二人はパニックに陥る。

「そ、そうだよ！ 今日も学校だよ！ は、早く準備しなくちゃ！」

「わわっ！ 俺は一回、帰るね！ 香奈！ また後で！」

「あ、う、うん！」

その騒がしい中で、康介は急いで、香奈の自宅から飛び出していく。

「……はあ。何か、良かったな……」

康介が去ったりリビングのソファアの上で、香奈は静かに喜びを噛み締める。

自分が人間でないと、知った上での反応。

これは長年、悩んでいた香奈にとっては大きな進歩である。

「嬉しいなあ……！　ますます好きになっちゃった……！」

近くにあったクッションを抱きかかえ、クツクツと笑う。

「昨日はキスもしちゃったし……ああ！　そういえば、しちゃったんだよね！　康介と！」

恥ずかしさと嬉しさのあまり、足をバタバタさせる。

と、そこで、一つの事実気付く。

「あ……学校まで、まだまだ時間あるんだっけ……だから、事情を説明しようとか思ったのに……もう。康介は慌てんぼうだなあ」

自分も慌てていたのだが、そんな事を忘れ、康介の慌てた表情を思い出し、またクツクツと笑い始める。

「でも、私もそろそろ準備しようつと……あ……」

そう言っつて、香奈はシャワーを浴びに風呂場へと向かおうとする。と、そこで、香奈の身体が大きく曲がる。

咄嗟にソファアの背もたれに捕まり、倒れこみはしなかった。

「あう……何でだろう……吸血鬼になつてる間は全然平気だったのに……」

既に瞳の色が黒に戻っている香奈は、現在は人間になっている。

そんな香奈の調子は、非常に悪そうである。

「うっ……で、でも、康介を心配させる訳にはいかない……」

そう言っつて、自分の部屋と足を進める。

自分一人しか住んでいない家の中を。

同時刻

康介は自宅へと朝日の射す住宅街を走っていた。
まだ人気はなく、雀の鳴き声が冷たい空気に響くだけだ。

「そういえば……この辺りだったよね。昨日、俺が襲われた場所は」
走りながらも、そんな事を喋る余裕がある康介。
やはり、昨日、香奈の「吸血鬼」として力が働いてるようだ。

でも、朝なのに、何で吸血鬼の力が働くんだろう……？

そう不思議に思いながらも、康介は走る。

直後に、香奈に力を分けられた瞬間を思い出し、再び顔を赤くするのだが。

「うわ……恥ずかしい……」

その記憶を消し去るように猛ダッシュで駆ける。

何事も無かったかのように元通りになっている、昨夜の場所を。

第五話「双子は楽しく、任務を遂行する」

非日常 記念すべき初夜

「ツ痛うう……最悪だよ……もう……」

日中、ずっと調子の悪そうだった香奈と別れて、数分後。今日も、昨日と同じで襲われている。

だが、相手は昨日の殺人鬼でなく、子ども二人。

12歳くらいの男女二人組。

その二人に襲撃され、死に掛かっている。

俺、最近、悪い事でもしたかなあ……

ふと、昨夜襲撃された場所と全く同じ道を逃走しながら、そう考える康介。

殴られた顔面を左手で軽く押さえながら。

そんな康介の今日を振り返ってみる。

香奈と別れ、自宅に帰った康介は学校の準備をし、登校。

ついさっきまで、元気だった香奈は調子が悪そうだったが、空元気で誤魔化していた。

昨夜の攻防が祟ったのだろうか、康介は学校を休むように言ったが、香奈は無理矢理登校する。

仕方がないので、康介も香奈に付き添って登校。

学校で変わらない日常を送った後、香奈を家まで送り届けて、別れる。

そして、自宅へと向かっていたのだが……

昨夜と全く同じ空き地で

夜風が肌に凍みる場所で

暗闇の中から、声をかけられた。

二人の幼い男女の声で。

「「みーつけた！」」

「……はい？」

最初は呆気にとられるばかり。

暗闇が支配する時間帯にもなつて、この場に相応しくない声が聞

こえたため。

そして、昨夜の殺人鬼と同じように、二人の男女が康介の前に姿を現す。

猫をイメージしたような服装。

フードには目を意識したようにボタンが二つ付けられている。

更に耳まで。

だが、サイズが合っておらず、二人ともブカブカの状態を着ている。

男の子と思われる方は紅い瞳に青髪ショート。

女の子と思われる方は蒼い瞳に赤髪ショート。

ショートといっても、肩にかかる程度の長さだが。

そして、何より目立つのが、二人の顔は瓜二つ。
「双子」という点だ。

そんな二人は楽しそうに、嬉しそうに、声を揃えて問う。

「お兄ちゃんは『黒坂 康介』お兄ちゃんだよね？」

「えっ……！？ どうして俺の名前を……！？」

昨夜に続き、驚愕を隠せない康介。

やはり、非日常は驚愕が多い。

「そんなの簡単だよ！」

「キイ兄」は物知りだもんねー！ ね！ 智樹！

「そうだよね！ 夢！」

どうやら、男の子は「智樹」

女の子は「夢」と名乗るらしい。

二人は笑顔でお互いの顔を見合わせる。

「キイ兄……？」

どうやら、その呼び方からして二人の兄であるようだが……
さっぱり見当が付かない。

何で、そのキイ兄って人が、俺の事を知ってるんだ……？

考えたところで、答えなど出る訳ないのだが。

「だよね！ そんなキイ兄の命令が！」

「康介お兄ちゃんの……えと……抹殺……だっけ？」

「うーんと……どうだっけ？」

「ハア！？」

物騒な事を言い出す双子を前に、康介は後ずさりを始める。

昨夜もいきなり攻撃されたし……こんな子どもに見えても、吸血

鬼かもしれない……

双子に警戒し、即座に逃げ出そうとするが……

「あ！ ダメだよ！ 僕たちから逃げようなんて！」

「ダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメ！」

そう叫び、双子が飛んだ。

かと思つたら、既に康介の背後に回っていた。

「はっ……！？」

咄嗟の判断で、前に軽く飛ぶ康介。

お陰で、双子の蹴りをかわす事が出来た。

これも香奈の力の一部を分けて貰ったためであろう。

「ありやりや。避けられちゃったよ。夢」

「強いんだね！ 康介お兄ちゃん！」

満面の笑みで手を取り合って喜び合う二人。

当の康介は冷や汗を掻きながら、恐怖に駆られる。

やっぱり……この二人も吸血鬼だ……でも……どうやって逃げよう……

昨夜は香奈が助けてくれたけど……

一応、辺りを見渡してみるが、誰も来なさそうである。

「あれれー？ 余所見はダメだよ！」

「そつだよ！ 私たちも結構、強いんだからー！」

そう聞こえた瞬間、智樹は夢を康介目掛けて投げてきた。

先ほどまで、手を取り合って、グルグル回って喜んでいたのだが、

それは智樹が夢を投げるための動作であったようだ。

「うわぁー！」

咄嗟に顔の前で腕を交差して、防御態勢に移る康介。

投げられた夢はそのまま、康介の腕に頭から直撃する。

「ぐっ……!!」

尋常でない痛みが熱さとなって、腕の筋肉と神経に伝わる。

受け止められた夢は、空中で三回ほど空中サーカスに入れるんじゃないかと思うぐらいの回転をしながら地面に着地し、康介に足払いを繰り出す。

「えいつ!!」

「わっ……!!」

その場に尻餅をついてしまった康介の上空から、高く飛んだ智樹が落ちてくる。

「いつきまーす!!」

「ッ……!!」

すぐに身体捻じる事で、智樹の全体重をかけたプレスをかわす事に成功するが、そんな康介の目の前に笑顔の夢が立つ。

「ダメだよー? 敵は二人なんだから」

その笑顔のまま顔面を殴り、康介を吹き飛ばす。

何も言えない激痛に襲われたまま、康介はコンクリートブロックに直撃する。

均等を保っていたブロックは異端の攻撃に、糸も簡単に崩壊。

辺り一面に砂埃が舞い、一時的に双子の視界を遮る。

「あれれ? もうお仕舞い?」

「んー……康介お兄ちゃんって、実は弱いのか?」

双子は嫌味など一切なく、純粋にそう思って、康介が居るであろう場所へと近づいていく。

と、そこで二人の顔に“何か”が飛んでくる。

「おっとつと!!」

「ふみゃあ!!」

咄嗟に軽い横っ飛びでかわす双子。

同時に、飛んできた“何か”が何か判断する。
それは“土”であった。

「外したっ……！ けど、十分！」

目潰しを外した康介は語尾を強調しながら言い、双子の間をすり抜け、住宅街へと続く道を走る。

「ああ！！！」

「逃げられたよ！ 智樹！」

「お、追いかけないと！ キイ兄に怒られる！」

「ふえええ！ それは怖いよお！」

すぐに康介の後を追う二人。

だが、二人は走るのではなく、地面を蹴り、飛んでいくように追いついた。

そして、冒頭に戻る。

「えっ………？」

気が付けば駅の側までやって来てしまっていた。

康介の正面には駅があり、そのサイドにはカラオケ店などの娯楽施設がある。

普段は、この時間でも人で溢れているのだが、今日は人っ子一人居ない。

これだ……俺が、最近、この街が可笑しいと思っただ理由……

人が一人も居ない。

思えば、昨夜の殺人鬼との戦闘中も、誰も出てこなかった。

あれだけ煩かったにも関わらず。

これはもはや「可笑的」といえるだろう。

しかし、今の康介には、そんな事を考えている暇は与えられなかった。

「追いついたよお！」

「覚悟してね！」

康介を飛び越え、前方に双子が着地する。

「うっ……」

またも後ずさる康介。

「これもキイ兄の命令だから！」

「もっかい言うね！ 覚悟してね！」

有無を言わず、双子が飛び掛ってくる。

「くそっ……！」

追い詰められた康介はヤケになり、気は引けるが、双子に向かって拳を突き出す。

しかし、そんな単純な攻撃が当たる訳もなく、虚しく空を切るばかり。

康介の腕をすり抜けた二人は、互いに蹴りを繰り返す。

「てえい！」

「うりゃあ！」

「ッ！！」

反射的に康介は目を瞑ってしまった。

すぐに、あの激痛が来ると分かっていたため。

そして、強い衝撃が康介を襲う。

だが、いつまで経っても、思っていた激痛は来ない。
痛みは来ることには来た。

しかし、腹部ではなく、左腕にだ。

訳が分からない。

そう思った康介が目を開けると……

「あ……あれれれれ……？」

「や、やっぱり康介お兄ちゃん……強い……？」

今度は双子が驚いていた。

が、その原因を見るなり、康介本人も驚いた。

何故なら、双子の蹴りを左腕一本で防いでいたためだ。

「ええええええええええ！？」

「うひゃあ！？」

「ひゅい！？」

康介の驚きの叫びに、双子は驚きつつ康介から距離を取る。

「え？ え？ え？ 何で？ どうして？」

本人も理解出来ない反射的行動。

「まう……知樹いゝ。康介お兄ちゃん。どうしたの？」

「えと……僕にもわかんないけど……やっぱり康介お兄ちゃんは強
いんだよ！」

「あ、そっか！ そうだね！ 強いんだね！……って、ああ……！
頭を両手で抱え、重大な事を思い出した様子の夢。

「ど、どうしたの！？ 夢！」

「お、思い出したよ！ 私たちの目的！」

「え？ ほ、本当！？」

「うん！ えつとね……ゴニヨゴニヨシカジカパラリラパラリラ……

……」

「あゝ……あ、うん……ああ！ そうだったね！」

夢は智樹の耳に近づいて、何かを話し、智樹はそれに対して、相槌を打つ。

そんな光景を、平常心を取り戻した康介は見つめる事しか出来なかった。

「よおし！ じゃあ！」

「うん！ もつかい！ だね！」

康介に振り向き直り、双子は再び、蹴りかかる。

「ま、またあ！？」

これまた、康介は先ほどと全く同じ様に、腕を交差して防御態勢に移る。

しかし、今回は、智樹は途中で着地し、低空飛行で夢の後を追うように飛ぶ。

「なっ……！？」

いわゆるフエイント。

完全に引つかかった康介。

時、既に遅し。

夢はそのまま蹴りの態勢で飛んでくる。

智樹は右手に拳を作って、低空飛行で飛んでくる。

夢の攻撃は防げるが、智樹の攻撃は直撃する。

またも窮地に追いやられた康介の行動は、本人すら予測していなかった行動だった。

腕のクロスを解き、左手一本で夢を受け止める。

「ふええええええ！？」

続いて、中腰になり、右腕で知樹も受け止める。

「みやあああ！？」

そのまま、何もせずに二人を放す。

足を掴まれていた夢は、見事に着地し、智樹と共に、再び距離を取る。

「……す、凄いね！　ね！　ね！？　智樹！」

「本当！　凄いよ！　康介お兄ちゃん！！」

双子は最初の時よりも、喜び合いながら騒ぎ立てる。

だが、先ほどは、それで油断して顔面を殴られた康介は警戒態勢のままだ。

内心は、またも無意識で行動した自分自身に驚いているのだが。

「じゃあ、ぼく達はこれで！」

「うん！　またね〜！　康介お兄ちゃん！」

「バイバイ！」

そう言つと、双子は何処かへと飛び去ってしまった。

「あ……へ？」

一人残された康介は啞然に取られる。

「一体、何だつたんだろう……」

誰も居ない駅前で一人佇む康介。

「寒い……とりあえず帰ろう……」

この事は、香奈にも言っておかないと……

あ、街の事も言っておかないと……

そう思いながら。

第六話「兄は力量を測りにやって来る」

非日常 二日目 夕日が眩しく輝く時間

「あの人は……一体、何処に……？」

夕日に照らされながら、ふとした疑問を口にする康介。

場所は街の東側に存在する建設途中のビルの中腹。

剥き出しの鉄骨が未だ高い天を目指している中で、康介は辺りを見渡していた。

「ようこそ。ここなら多少は人目が付かない上に、綺麗な景色が見えると思ったもので」

「！」

自分の背後から聞こえた声に対し、ゆっくりと振り返る。

そこには、康介が追っていた男性が立っていた。

「貴方は……？」

何故、康介はこんな所に居るのか？

「香奈は休み……かあ……」

双子に襲われた翌日。

学校に向かった康介はすぐさま香奈に、「可笑しくなったこの街」と「双子」の事を相談しようと思っていた。

しかし、いざ学校に行ってみると、香奈は休み。

仕方がないので、学校が終わるまで大人しくしておき、帰りにお

見舞いに行こうと考えたのだが……

「……え？」

それはお見舞い用にフルーツでも買っていこうと駅周辺の商店街に寄った時の事だった。

一人の男性が、康介の意思を引いた。

ショート黒髪に細い目。

まるで閉じているかのような目だ。

全身、主に黒っぽい服装に身を包んだ男性。

康介は何故か、その男性が気になった。

自分でも訳が分からないまま、男性の後を追った。

男性は康介に気付かず、街の東側に存在する、最も高く建設される予定のビルへと入っていった。

建設途中なのだが、その高さは既に街一番になっており、完成後の展望台は絶景との噂がある。

そんなビルの中へと入った男性。

一体、何のために？

康介は、そんな疑問を抱きながら、自分も後に続く。

そうして男性を探している内に日が暮れ始め、冒頭へと話は戻る。

「ああ。自己紹介が遅れました。私は「灰野 菊知」と申します。

先日は、私の弟と妹がご迷惑をおかけしました」

自己紹介と同時に、深く頭を下げる菊知と名乗る男性。

「弟と妹……って……貴方がまさか……「キイ兄」って人ですか……?」

昨夜の双子の件を思い出し、身震いをしながらも、警戒態勢に入る。

「はい。いや、本当にすみませんでした。あの子たちは目的も告げずに、いきなり襲い掛かったようでした……兄としての躰が足りませんでした」

右手で拳を作り、軽く額に当てながらも、再び謝罪の言葉を述べる。

「あ、いや……こ、こちらこそ……すみません……」

別に康介に非は一切無いのだが、謝り続けられ、自分も何となく謝ってしまう。

「いえ、こちらの方に非がありますので……ところで」

よく見ると、本当に目を閉じてるなあ……この人……

と、康介は思った。

「あ、はい。何でしょうか」

心中でそんな事を思っていたが、すぐに返事をする。

「何故、貴方が此処に誘われたか。ご理解出来ます?」

「あ……」

そういえば、そうだ……

俺は何で、この人を追って来てしまったのだろう……

「順に説明しましょう」

菊知は手を軽く合わせ、話し始める。

「まずは昨夜の私の弟と妹の件から」

「双子は「貴方の力量を測る」ために、貴方に襲い掛かりました」
「ええ!?!」

何故、何故に力量？

と、思ったのだが、今の菊知は答えてくれない。

「その頼みごとをしたのは私です。命令ではないので、そこは間違えないように」

「は、はあ……」

それよりも聞きたい事はまだあるのだが……

「次に、貴方が私を追ってきた理由」

「それは……まあ、過去の因縁でしょう」

「……過去の因縁……?」

その一言で思い浮かぶのは……

あか

まっかなあか

あかあかあか

あかあかあかあか

あかあかあかあかあか

あかあかあかあかあかあか

あかあかあかあかあかあかあか

「うっ……」

あまりに思い出さなくない出来事に、康介の意識は途切れそうになる。

右手で額を押さえる。

「大丈夫ですか？　というか、その様子ですと、あの事件の肝心な部分は覚えていないようですが」

心配そうに康介に近寄ろうとする菊知。

そんな中、康介の頭の中では、先ほどの菊知の言葉に対しての思案が繰り広げられていた。

肝心な部分……？

何を言っているんだ。この人は。

あの事件はあかいだけ。

ただただ、あかが支配するだけ。

ただ、あか……が……

そこで康介の記憶が意思とは関係なく、再生される。

『おや……こ……は……』

え……？

『……下さい……私……吸血鬼……』

この声は……

今、目の前に居る人と同じ……？

康介の目付きが一瞬にして変わる。
その変わった目は、菊知に対して向けられる。
そこで菊知の声が聞こえた事で、康介の記憶は蘇る。

「思い出しましたか？」

「あっ……」

思い出した……

この人は……コイツは……

コイツはコイツはコイツはコイツハコイツハコイツハ

「吸血鬼……!!」

静かに呟いた程度の声。

だが、菊知と康介しか居ないこの場所では、深く響いた。

「え？ いや、私は……」

そう言つて、更に近寄ろうと菊知に対し、康介は後ずさる。

「くっ、来るなあ……!! 来るなあああああ!!」

過去の事件。

康介のトラウマ。

あかいあかい。

吸血鬼。

康介の住んでいた街一つを消滅させた吸血鬼。
自分の親戚の仇。

ソイツが今、目の前に居る。

パニックになるのも当然。

今の康介は泣き叫ぶ事しか出来ない子どもと同じである。

「あ、いや！話を聞いて「来るなっ！！」 吸血鬼め！！ 来るな
っ！！来るなああ！！」

菊知の話を聞こうともせず、目尻に涙を溜めた康介は背を向け
て走り出す。

「あ！そっちは！！」

初めて感情的になった菊知の静止なども聞かずに、走る。

だが、思い出して欲しい。

此処は建設中のビルの中腹だ。

当然、窓もなければ、壁もない。

そんな場所で外に向かって走り出せば落ちるのは当たり前。

「あっ……」

急に身体が軽くなる。

足場がないのだから。

ビルの外に出てしまった康介は、そのまま落ちる。

地上から80m。

そんな所から落ちれば、死は免れない。

「まっ……！！」

咄嗟に、菊知が手を伸ばすが、届かない。

いや、届いたとしても、康介はその手を払いのけたであろう。

そのまま何も考えられないまま、康介は落ちていく。

そこで康介は何か暖かいものに包まれた。

「康介え!!!」

第七話「魂はある程度を理解した上で行動を起こす」

ビルの中腹から落下した康介。

だが、そんな康介を優しく包む者が。

それは……

「ッ！」

「なっ……！？」

さすがに菊知も驚いた。

康介を抱きかかえた「夢野 香奈」は、そのまま菊知の居る階の天井にぶつかり、部屋の中央に転がり込む。

どうやら香奈は、地上から飛び、康介を抱きかかえ、そのまま康介が落ちた階まで突っ込んで来たようだ。

(この少女は……)

菊知が床に倒れたままの二人を見ながら、そんな事を思っている間に、ようやく落ち着きを取り戻した康介が香奈の存在に気付く。

「えっ……？ 香奈……！？」

すぐに香奈を抱きかかえる。

香奈は弱弱しく目を開け、呟く。

「良かったぁ……康介……無事だったんだぁ……」

「どうして……！？」

その一言は今の康介が発するでしかない言葉だろう。

「あはは……今朝、康介が帰った後、そのまま倒れちゃって……それで、目を覚ましたら、康介が危ないって……直感で感じて……私の力の一部を辿って……此处に来たら、康介が落ちてきて……それで……私……」

ただでさえ調子の悪い香奈。

そんな中、街中を走りぬけ、落ちてくる康介を抱きかかえたまま、ビルの中腹に突っ込む。

もはや「只の友人」にはとても出来ないレベルだろう。

だが、この「夢野 香奈」という少女は、それをやってのけた。

これは素晴らしい。

賞賛に値すべきだろう。

「……ごめん……！！ 俺のせいで……！！」

俯き、悔し涙を流しそうなまでに顔をくちやくちやくにしている康介。

「ううん……大丈夫だよ……康介が無事なら……それより……」

そう言っつて、香奈は視線を康介の後方にいる人物に向ける。

夕日をバックに灰野 菊知は静かに立っていた。

「感動的なシーンは邪魔しませんよ。こう見えて空気は読める方なので」

両手を軽く上げながら話す菊知だが、その閉じられた目から放たれる殺気は凄まじい。

「双子の報告によると……貴方は康介君のご友人ですね？ 二日前に殺人鬼を共に倒した」

その言葉に二人の身体が震える。

「見て……いたんだ……」

康介に肩を貸して貰い、立ち上がりながら、香奈は答える。

「ええ。私の弟と妹が。それで、康介君とお話をしようと思ったのですが……」

そう言っつて、菊知は香奈を指差す。

「順番が変わりました。先に貴方の事を聞きたくなつた」

「……」

「か、香奈……」
脅える康介を「大丈夫だよ」と笑みでなだめ、香奈は自分の力で立ち上がる。

「私は貴方が何者か知らない。貴方と康介の関係も。双子とかいうのも」

「でも、康介を傷つけるのなら、私は、貴方を……倒す」
その目付きと気迫は菊知の殺意にも勝るような鋭さである。

「ふむ。さっきの落下は事故なのですが……まあ、良いでしょう」
菊知は右手を顎に当て、本題に入る。

「貴方は『吸血鬼』ですか？ それとも『半人半吸血鬼 ダンピール』ですか？」

「……？」
「『ダンピール』……？」

康介は不思議そうに首を傾げ、香奈は自分の知らない単語を呟く。

「おや、知らないようで。では、説明を」
緊迫した状況だが、菊知は優しく説明をしてくれる事に。
何処か紳士的な人物である。

「『吸血鬼』は2種類の生い立ちがあります。
「生まれながら吸血鬼」と「吸血鬼に噛まれて吸血鬼になった人間」の二つです

前者は最初から完全な吸血鬼ですが、後者の場合は「完全に吸血鬼」になれない場合もあります

実は、吸血鬼に噛まれた際に「魂の奪い合い」が行われます。
意思の弱い者は吸血鬼の魂に負け、吸血鬼に
意思の強い者は吸血鬼の魂を跳ね除け、「ダンピール」に
ここまでが「ダンピール」の誕生の仕組みです」

「はあ……」

突如、始まった講座に、二人は頷くのみ。

「はい。では続けます」

「『ダンピール』とは「吸血鬼の力を持った人間」の事を示します
まあ、実際には、完全な吸血鬼の力には及びませんが、人間以上
の身体能力を発揮したり、五感が優れたりします
身体は人間そのものなので、日光で滅びたりする事はありません
が、心臓や脳にダメージを受けた場合は死にます

自然治癒能力は高いのですが
と、まあ、こんなものでしょう」

軽く手を二回叩き、講義の終了の意を示す。

「はあ……」

もう完全に殺意などが消えた空間で、二人は呆然と反応するだけ。

「ちなみに、私と双子はダンピールです」

「え……？」

そこで康介が一瞬、不思議そうな顔をしたが、菊知、香奈両名は
気付く事はなかった。

じゃあ、十二年前の「吸血鬼」って……？

康介がそんな事を考えている間に、香奈は喋りだす。

「えと……それで、私が吸血鬼かダンピールか知りたい……と？」

「そうですね」

ようやく空気が最初の頃に戻り始めた。

「まあ、あの時の事を見られていたなら、隠す必要も無いから言うけど……私は吸血鬼だよ」

その答えを聞いた菊知は素早く懐から細長い筒状の物を取り出し、ボタンを押し、蓋を開ける。

菊知はそのまま筒状の物が液体を自分の目の前の空間にぶちまける。

かと思うと、その液体に向かって弾け出しそうな右手の中指を親指で抑えて……放した。

すると……

「ッ……！ 康介ッ！ 避けてッ！！」

「えっ……？」

呆然と見ているだけの康介。

その康介目掛けて飛んでいく液状の弾丸。

「このっ……！！」

香奈は康介を押し飛ばす。

同時に、液状の弾丸が香奈の右腕を貫く。

「ッ……！！」

「香奈！？」

押し飛ばされた康介は床に倒れたが、すぐに立って、香奈の側に近寄ろうとする。

「残念です。吸血鬼なら、今すぐ殺します」

先ほどまでの雰囲気は完全に消え、殺意剥き出しになった菊知が再び現れる。

香奈の肩を抱きかかえ、康介は香奈の右腕を見る。

「……………」

血は既に止まっており、傷も修復に向かっている。

「流石吸血鬼。水鉄砲如きでは殺せませんか」

康介は菊知の方に顔を向ける。

その左手には筒状の物体、水筒が握られていた。

「ただの水をダンピールの力で弾き飛ばす。これで立派な弾丸の完成です」

そう言いながら、近づいてくる菊知。

「うっ……………」

あの時のトラウマが、また蘇る康介。

身体は勝手に震えだし、止まらない。

ダメだ……………！ 今はダメだ……………！ 香奈を……………！ 今は香奈を守るんだ……………！！

目を瞑り、首を2、3回ほど横に振り、康介は目を開ける。

目の前には傷は治ったが、無理をしすぎたのか、気絶してしまっている香奈の顔。

これだけで、康介は自らのトラウマさえも心の中に仕舞い込む。

「疲労困憊疲労困憊のようですね。では、今のうちに捕らえて……………って……………」
意外そうな表情で菊知の歩が止まる。

床に香奈を寝かせた康介が、菊知を睨んで、立ちほだかった。

「……康介君。貴方は私の邪魔をするのですか？」

「香奈が俺を守ってくれたから……今度は、俺が香奈を守る番だ」

「それに、俺だって……香奈の力の一部を貰ってるんだ」

その表情は幼い子どもが意地を張っているような表情だったが、その決意はとて固いように見える。

康介と香奈の間には、それほどまでに深い物があるのだ。

「……そうですか。では、貴方も死んで貰います」

そう言い、菊知は右目を薄く開ける。

それだけで圧倒的な殺意と威圧を感じられた。

ただ右目を薄く目を開けただけなのに。

過去のトラウマさえも消え入りそうな威圧に、「人間」である康介が太刀打ち出来る訳がない。

「あつ……」

康介は完全に身動きが取れなかった。

その隙に、菊知は右手で拳を作る。

強力な一撃が放たれる。

そう康介が感じ取った……

次の瞬間

「不意打ちは好みではない。だからあれだ。こーゆー場合は「しゃがめっ！」って叫ぶべきかあ？」

何処かで聞いたような軽いノリの声が聞こえてきた。

「え？」

「！」

康介はその言葉に本能的に従い、しゃがむ。
対する菊知は第三者の声に戸惑い、対応が遅れた。
その結果。

「ッ！」

康介の真上を垢錆びた鉄骨が通り過ぎる。
そのままかわし損ねた菊知の左腕を跳ね飛ばす。

「グッ……！」

菊知の狐目が酷く歪むが、除々に再生していく左腕を見ながら、
康介から遠のく。

鉄骨は投げた力が強かったのか、外へと飛び出し、そのまま地面
へと落下していった。

「こーゆー登場の仕方はあれだなあ！」「主人公と戦った敵が味方
になる登場の仕方」だな！ ふひひ！ だが！だが！ 俺は
違う！ 俺はこの「玩具共」を壊されたくないだけだ！ おっと、
これでは「主人公を倒すのは俺だ」とか言ってるライバルキャラと
何ら、変わらないなあ！」

相変わらずの煩い声でビルの中腹へと続く階段の場所に立っ
てい
る「殺人鬼」

赤黒く染まつた作業着を難無く着こなし、口が裂けるんじゃない
かと思うぐらいにニタアと笑い、投げきったモーシヨンを解除して
いた。

「えっ！？」

「貴方は……！？」

驚愕したのは二人。

康介、菊知共に、この殺人鬼が「既に死んでいる」のは知っている。

だからこそ驚いたのだ。

「はははは！！ その顔！「何で生きてるんですか！？」って驚いてるなあ！ まあ、俺も驚きだあ！ 鉄骨を引っこ抜いて貰ったら、勝手に傷が治るんだもんなあ！ 鉄骨を引っこ抜いたリミールも「ふむ」とか言っただけ驚いていたなあ！ 何か今、最高に楽しい訳だが！」

笑いながら殺人鬼は語る。

その中で出てきた「鉄骨を引っこ抜いた奴」リミールとは？

また、殺人鬼が蘇った原因とは？

「まあ、ともかくだ！ このままだと俺は本当に主人公のライバル兼将来、仲間になる予定キャラになっちゃってしまうので、ここらで悪役に戻ろうと思う！ と言う訳で！ もう良いであろう！」

殺人鬼のその言葉を皮切りに、上下の階段からゾロゾロと大量の人が流れ出てきた。

「え？ え？ ええ！？」

「こんなに……！！？ 気付かなかった……！！」

またも驚愕する二人。

死者の蘇りに大量の人々の登場。

誰だっただけ驚くであろう。

と、二人が驚いている間に、大量に居る内の一人が、康介の背後から忍び寄り、康介を蹴飛ばす。

「いたっ！」

そんな声をあげ、康介が怯んでいる隙に、一人が香奈を持ち上げ、上階への階段へと逃走を図る。

「あっ！」

康介もすぐに気付き、その後を追う。

人々は何故か、康介の通りやすいように道を空ける。

その事を多少は気にした康介だったが、今は香奈を助ける事が最優先だった。

「あ！ ちょっと！」

すぐに菊知も後を追おうとするが、それを両手を広げ、上に続く階段と菊知の間に立ちはだかった殺人鬼が止める。

「恩は返さなくてはな……？ リミーはあの二人に用がある。お前に用は無い。だから……俺が殺しても良いって事だな！！」

「くっ……！！」

仕方なく、康介たちを追うのを諦め、殺人鬼に対して構える。

周りには大勢の人間。

前方には殺人鬼。

何とも奇妙な場面である。

「最高に楽しくなって来たぞ！！ クライマックスって奴だな！！」
殺人鬼の歓喜に満ちた声が、既に日が沈み、暗くなったビルの中で響いた。

第八話「殺人鬼と兄弟妹と一般人（前編）」

夕刻も過ぎ、暗闇が夜と名を変え、支配し始めた時間帯

建設中のビルの中腹に、ソイツらは存在した。

「やはり……！」

推測が当たり、灰野 菊知は戦闘体勢に移る。

その対角線上には意外と綺麗に並んだ歯を見せ、身体から離れた手を気味悪く動かし、のらりくらりと左右に首を振る殺人鬼が笑って立っていた。

「さてさて、では殺そう。久々に殺そう。SAW！^{ソウ} 殺そう！いやはや、実に可笑しいとは思わないか？ 死んだはずなのに生きてるんだぞ？ こりやもう、空気を読んで、『私、実は吸血鬼かゾンビだったアルヨ』って言わなければいけないような気がしてきたZE」

軽くウイंकをしながら「にゅははー！！」と天井を仰ぎ見て、高笑いをする。

そんな殺人鬼を見ながらも、菊知は今の状況を把握しようと努めていた。

そうしないと、体内から「怒り」が飛び出してきたから。

「（死者が生き返るハズがない……と言う事は……コイツも“吸血鬼”ですか……！）」

右手を顎に当て、即座にそう判断する。

確かに。

この「殺人鬼」は二日ほど前に、黒坂 康介と夢野 香奈の手によって絶命したハズ。

それが蘇り、この場に居る事など、常識の範囲内では考えられない。

となると、考えられる答えは一つ。

この殺人鬼も吸血鬼であるという事。

「（というか、弟妹きょうだいの情報からして、鉄骨を片手で持つ時点で吸血鬼だと思っていましたか……）」

少し額に大きめの汗を浮かべながら、菊池の狐目が線目となり、苦笑いをする。

「（そうになると……私一人では圧倒的に不利……）」
確かに。

相手は「吸血鬼」

対する菊知は「半人半吸血鬼 ダンピール」である。

その差は歴然。

そんな状況の菊知に対し、殺人鬼兼吸血鬼は早くも行動に移る。

「しかしだなあ……メインヒロインが攫われ、主人公が屋上に向かった後に、サブキャラとかませの闘いなんぞ、見たい物好きな奴はいるのだろうか……？ オツファ！！ またも自分自身をかませと称してしまったあ！ もうダメツス……このままじゃあ、いけない！！ そんなかませキャラを脱しなければ！ そうしないと延々と出ては殺され復活。殺され復活。最終的に黒幕前の前座で終わってしまう！ 俺の意思は無視なのか！？」

といつても、攻撃などの行動ではなく、両手で頭を抱え、ゴロゴロと床を転げまわる行動だが。
ちなみに、その際に周りに居た意識の無い操り人形になった街の人々は、殺人鬼の転がる攻撃に巻き込まれ、転倒を続けていた。
哀れ。

この行動は本心が否か。

それを見極めようとしつつも、菊知は疑問を口にする。

「……………それよりも、この街の人々は一体、どうしたんですか？
貴方は何か知っているみたいですが……………それに 『リミー』と
いうのは……………」

と、此処で、菊知が疑問に思っていた事を口に出してみる。

その言葉に「ウリイイ……………」と何故か可愛らしく言ってみる
が、全く可愛げのない殺人鬼が反応し、立ち上がる。

倒れた人々も無言で立ち上がる。

そして、深呼吸を1回行い、喋りだす。

饒舌な殺人鬼にしては、酷く珍しく短い言葉で。

「あえてあえてあえてあえてあえてあえてあえて言おう。何も知らん」

「……………は？」

呆気にとられる菊知。

流石に、警戒しながら殺人鬼の言動に注目していた菊知だったが、
この本心とも取れる言葉に驚かれずにはいらなかった。

そして殺人鬼は語りだす。

「だから、何も知らんのだ。俺は鉄骨を引っこ抜かれ、生き返った。

そして、引っこ抜いた奴は「リミー」と名乗るだけ。その後「助けてやったんだ。こちらの頼みを聞いてくれないか？」と頼まれ、仁義に意外と熱かった俺は頼まれてやっているだけだ。主人公とメインヒロインを掻っ攫った「リミー」に誰も近づけさせない。という頼まれ事を」

随分とあっさりした事実を言い、殺人鬼は近くに居たサラリーマンの恰好をした人間の右腕を掴み、引き千切った。

右腕を取られたサラリーマンは痛みを表情に浮かべないまま、つまり無表情で、よたよたと後方に下がり、そこで仰向けに転倒する。右腕の接着部分であった場所からは大量の赤い液体が流れ出ている。

だが、そんな状況であっても、周りの人々は無反応である。

「んなッ……!？」

そんな中、一人だけ驚愕を隠せない菊知が居た。

数歩、引き下がるが、踏み止まる。

そして、内心に湧いた怒りのせいで力の差など忘れ、叫ぶ事で怒りを発散させる。

「何を……してるんですかあああ

!!」

感情に身を任せ、殺人鬼に向かって走り出し、殴りにかかる。

しかし、殺人鬼も「ハイ。ソウデスカー」と殴られるほど、甘くない。

持ち主の身体から離脱した腕を、向かってくる菊知目掛けて投げつけた。

「ッ!」

その腕を受け止めた事で、菊知の怒りが一気に冷めていく。
足を止め、その腕を見つめながら。

「何故……こんな事を……？」

「ん？ むむ？ “何故”？ サブキャラを殺すために武器が欲しかったからだ。使える物は何でも利用！ おお！ 地球に優しいが人間には最悪のエコだな！ ン？ エコ？ これはエコじゃない気が……おおおお……すみません。地球。すみません。人間……つて、別に謝る必要はないではないか！ あ？ やはり謝罪すべきなのか……？」

一人で考え出し、頭を捻る殺人鬼。

その姿は菊知を挑発するための演技などではない。本当に悩んでいるようだった。

その間に、菊知は持っていた腕を静かに床に置き、目に怒りを宿らせ、殺人鬼を睨む。

「……もう我慢出来ません。殺人鬼。貴方を殺します」
全身から、瞳から怒りを露にして。

其処にいた菊知の頭の中には、既に「力の差」という言葉は無かった。

そんな菊知を見て、殺人鬼の目に歓喜が宿る。

「おお。サブキャラの分際で生意気な。だが、これは“覚醒フラグ”だな。怖い怖い。

てか、「もう」って、お前と出会ってそんなに経っていないが……そこまで怒らせてしまったのか？ やっぱり怖いな……では……殺そう。饒舌に語りながら殺そう。どんな手段を使っても殺そう。それが殺人鬼である俺の務め。リミィの頼まれ事を果たす事になる」

菊知は水鉄砲を使おうと考えたが、周りに居る街の人々に当たる事を考慮し、それをやめ、格闘のみで挑む事を決める。

殺人鬼は「（そーいや恰好良い事言ったんじゃないか？ 俺。あのアニメの録画予約したっけか……もう時代はブルーレイだよなあ……）」とか考えながら、目の前の獲物の動きを観察していた。

「……死になさいッ!!」
「だけど断る」

一瞬で距離を詰めた菊知は、肘撃ちで殺人鬼の腹部を狙う。

その一撃を敢えて受け止めた殺人鬼は菊知の頭を両手で押さえ込み、頭突きを喰らわす。

「んぐっ……!!」
「たわばっ……!!」

頭突きの衝撃が強過ぎたために、菊知の頭から手を離し、数歩、下がる殺人鬼。

その隙に菊知が右手で殺人鬼の顔面に程よい感じの右ストレートをお見舞いする。

「んが……!!」と情けない声を上げた殺人鬼だが、菊知の右腕が戻る前に右手で菊知の右腕を掴み、動きを固定する。

そして、お返しと言わんばかりの左アッパーを菊知の腹部に叩き込む。

だが、それを菊知は左手で受け止めた。

「ちょ！ 普通は素直に喰らって、「やるな……」とか言うシーンちゃうの!？」

「そんな義理はありません!」

無駄口を叩いた殺人鬼の隙を狙って、掴まれていた腕を振り解い

て、後方に下がる。

殺人鬼は「まう〜」とか言いながら、猫背になる。

「ふひひ。中々、やりおる」

「減らず口を……その余裕、命取りになりますよ」

お互いに先ほどの攻撃の際に負った傷は回復したようだ。

流石、半人半吸血鬼 ダンピールと吸血鬼だけある。

菊知は手刀を作り、殺人鬼の攻撃に備える。

しかし、殺人鬼は周りに目を配るばかりで、菊知の行動を一切見
ていない。

「余所見まで……」

自分が嘗められている事に多少の怒りを感じつつも、何かあるん
じゃないかと思い、菊知も周りを見る。

と、そこで殺人鬼は有限実行を行う。

「そーいや、思い出したんだが、サブキャラはどうやら、この周り
の奴らが傷つく事がえらくお気に召さないらしい」

そう言って、近くに居た子どもの腕を取り、持ち上げる。

「なっ……!?!」

驚愕する菊知。

その反応を見た殺人鬼は嬉々として、自分の考えが正解であった
事に確信を持つ。

「その反応。実に実に実に正解であったようだ。では、この子ども
を外へ放り投げだそう。鬼畜！ 最悪！ 外道！ んん……俺は
マズじゃないから、良い響きではないな……まあ、だが、有限実行
って事だな。どんな手段使っても殺すと言ったからな」

と、殺人鬼は子どもを外へ投げ出さんとして、腕のみを大きく振

り被る。

体重の軽い子どもは重力に逆らい、殺人鬼の上を跳び越して、背中の方へと持っていられる。

そして、子どもを外に投げ出し、それを助けに行くであろう菊知に追撃をかける。というのが殺人鬼の作戦であった。

本来ならば、何も支障などなく、実行されるはずだった。本来ならば。

「んいゝ……えいつ！」

「たわばツ！？」

今、正に投げられようとしていた子どもが、殺人鬼の背中を思いっきり蹴った。

その際に、手を離してしまい、子どもはスルリと手を抜け、地面に見事着地。

スタタツと逃げ去り、菊知の下へと走り寄る。

背中を左手で摩りながら、殺人鬼は、その子どもへ視線を移す。

普通の子どもの蹴り程度なら耐えられたが、殺人鬼の背中に走った痛みは半端ではなかった。

何か、こつ……自分と同等の化け物が放ったような蹴りである。

そこで、先ほどから驚きっぱなしの菊知が叫ぶ。

「智樹！？」

菊知が驚いた理由。

それは殺人鬼が子どもを人質に使おうとしていた事ではなく、その子どもが自分の弟だったため。

「はゝい！ キイ兄のために来たよゝ！」

殺人鬼に投げられそうになった子ども

「灰野 智樹」は満面の笑みで、返事をした。

相も変わらず、猫の恰好をした服装が異様に目立つ。

殺人鬼は、この恰好の子どもに不信感を抱かなかったのだろうか……？

という疑問が湧き上がる瞬間であったが、今はどうでも良いだろう。

「夢もいるよ〜！」

と、明るい声が殺人鬼の背後から聞こえた。

「鈍痛ツ！？」

殺人鬼の背中目掛けて、ロケット頭突きを喰らわせた夢も、ササツと殺人鬼から離れ、菊知の下に移動する。

うつ伏せに倒れこんだ殺人鬼は二回の奇襲に、涙目になりながら顔だけを上げる。

「な、なんなんですか……その二人は……」

その質問に、二人の特徴的な服装の双子は答える。

「ふふん！ 僕達は！」

「キイ兄の弟妹！」

智樹は右腕。

夢は左腕を高らかに上げ、背中合わせになる。

「智樹！」

「夢！」

「二人は……」

と、そこまで決めポーズも台詞も完璧の息のあった二人だったが、そこで止まってしまい、お互いに顔を見合わせ、同時に菊知の顔を見る。

「えへへ……まだ決めてなかった」
純粋な笑顔で、そう言った。

菊知は右手で拳を作り、額を押さえながら「貴方達は……」と深い溜め息を吐いた。

そんな兄の反応に、双子はオロオロと不安になりだす。

「キ、キイ兄……僕達、悪いことしちゃった？」

「ご、ごめんなさい！ キイ兄の役に立ちたくて……！」
すぐに涙目になる双子を、菊知は一回、微笑した後に、ポンと両手をそれぞれの頭の上に乗せる。

「そんな事ありませんよ。お陰で助かりました。ありがとうございます
ます」

笑顔でそう言った。

その言葉と笑顔に、すぐに双子も笑顔を取り戻す。

「良かった……！ 良かったね！ 夢！」

「そうだね！ 智樹！」

手を取って、ピョンピョンと可愛らしいジャンプを繰り返す双子。
そんな光景を微笑ましく見つめる菊知。

「俺は空気を読んだ。ところで、リミーよ。こーゆーシーンで普通は、敵を倒した後にやる感動的なシーンではないのだろうか？ てか、三人ともサブキャラだぞ。虚しい。非常に虚しいな……おい。というか、流石に3対1って敵しくないか？ お前さんも何か重要な事やってる場面かもしれないが、手伝ってくれないだろうか？」

そして何時の間にか立ち上がって、周りに居た人々の肩に腕をかけ、三人の微笑ましいシーンを見ながら、救助要請をした殺人鬼は
呟いた。

その救助要請に、殺人鬼に肩を貸していた10代の少年は答える。
「そうだな。こちらも大方、片付きそうだ。良いだろう」

その言葉が途切れると同時に、周りの人々は懐から、何やら物騒な物を取り出した。

それは、武器なるもの。

主婦は包丁。先ほど、腕を千切られたのは別のサラリーマンはトンカチ。

10代の少年はサバイバルナイフ。どれも接近戦用の武器ばかりである。

「な……」

「ええっ!?!」

その光景に、ただ、驚くことしか出来ない兄弟妹。きょうだい

「……本来ならば拳銃がベストだが……生憎、警官は最下層でな。我慢してくれ」

その台詞を、ビルの中腹。灰野家三人と殺人鬼が居る階の全ての一般人が口を揃えて言った。

第九話「殺人鬼と兄弟妹と一般人（後編）」

夜が支配する時間帯

「そんな……街の人々に何をしたんですかっ!!」

再び、菊知の声がビルの中腹に響き渡る。

建設途中で壁が無い中腹で叫んだために、その声は夜空にも多少、響いたであろう。

「別にいゝ？ 俺は何もしてはいないさ。詳細はリミィに聞いてく
りゃ」

殺人鬼は武器を構えた街の人々に囲まれながら、ヒョコヒョコとビルを支える柱の一つへと近づく。

「先ほど、黒坂 康介に話したばかりだ。二度も同じ事を言うのは面倒だ」

10代のサバイバルナイフを構えた少年が、そう答える。

部屋中に存在する一般人の方々は、獲物を構え、うんうんと頷く。

「くっ……!!」

完全に囲まれている。

智樹と夢という味方が増えたとはいえ、この階に居る一般人の数は50人ほど。

先ほどまでは、ただ、見ているだけの観客に過ぎなかったが、今は違う。

明確な殺意を持って接してくれる人たちへと成り果てた。

いや、最初からそうだったかもしれない。

「キイ兄」

「私たち、どうすれば良いの？」

菊知の上着の裾を引っ張りながら、智樹と夢が疑問文で尋ねてく

る。

「この人たちは多分、操られているだけなんです……だから、絶対に殺してはいけません」

対する兄は、そう答えた。

それだけだが、双子は意味を理解したらしく、「わかった!」と元気よく返事をし、人ごみの中へと駆け出す。

「……気絶させる気か。良いだろう」「」「」

五人ほど、声を揃えて答え、双子の迎撃に移る。

しかし、この双子。

半人半吸血鬼 ダンピールである。

そう簡単にやられる訳がない。

ましてや、敬愛すべき兄の頼みである。

失敗などするハズがない。

「てえい!」

「やあ!」

聞こえてくる声は子どもそのものだが、その行動は常人離れしていた。

襲い掛かってくる人々の攻撃を簡単に避け、首筋に手刀で攻撃を与えていた。

一撃でも喰らった人々は、意識を失い、次々と倒れていく。

「……やるな……総攻撃でお相手しよう」「」

「……」

13人ほどが、そう答えののだが、今度は言葉通りに残りの45人ほどが双子を仕留めようと武器を振るう。

だが、その攻撃は単調で、大きく振り被って振り下ろす、という

ものだったため、双子は難無くかわせる。

そして、再び首筋に攻撃。

数で押されようが、双子にとっては何も問題はない。

「おお！ まさに何とか無双だな！ 雑魚をバツバツバツとなぎ倒す！ 殺さないのが優しさだな。おい。ところで……何故、何故何故何故、殺さないんだ？ 今はお前達にとって疫病神でしかあるまい、この街の住人を」

先ほど、柱に近づいていた殺人鬼は、その柱に手を突っ込み、中から鉄骨を引っこ抜いて、持っていた。

右手で持ち、それを左手の手の平にペシペシと軽く打っている。そんな事をしながら、殺人鬼は双子の兄である菊知に問う。

菊知は双子の活躍を見ていたのだが、殺人鬼の問いが来ると、殺人鬼を睨みつけ、迷いない答えを返す。

「……親の居ない私たちを、まるで自分の子どものように面倒を見てくれた。気軽に話しかけてくれた。品物を安くしたりしてくれた。友人になってくれた……この街の人々は優しい……だからです」

それは灰野家に優しくしてくれた人々への感謝の気持ち。

それが深く籠った言葉だった。

「……成る程成る程成る程……ど。そんな優しい街の住人を、俺は躊躇いなく殺しまわっていた時期もあったわけだ！ 傑作！ 傑作う！！ いや、それは悪い事をした！ だが、許せなどは言わん！ だって、犯した罪は償う以外に消す方法は無いのだから！ イヒヒヒヒヒ！！ いや、悪い。今のは昔、読んでいた漫画の台詞の一つだ」

左手で腹を抱えて笑い出す殺人鬼。

今までの言葉、殺人鬼の本心ではなく、ただ言いたかっただけという理由で言われた台詞。

それでも、菊知を怒らせるには十分であったが。

「そう……だから、私は貴方を許しません」

「私たちに優しくしてくれた、この街の人々を殺し回っていた、殺人鬼。貴方を！」

怒りで感情を支配されていながらも敬語な菊知は手刀で構える。

「ああ……成る程。先ほどの怒りはソレが原因だったか……実に下らない。人は死んで逝くのが常識だろう？　それが俺の手で、ちょっと早まっただけ。それなのに、何故、貴様に恨まれなければならぬ？　おおおお……！　ちょっと哲学っぽい事言った！　20点だな！　まあ、俺は別に殺せれば良いわけだ。だって、俺は“殺人鬼”だからな！！」

殺人鬼の本音。

自分の思うが侭に人を殺す。

故に、殺人鬼。

これが、彼が生きていく上で出した、一つの答えであった。

言葉の語尾で、殺人鬼は鉄骨の先端を床に擦りつけたまま走り出し、菊知に右方向からの横薙ぎを繰り出す。

「この……下種があ……！！」

菊知は、その横薙ぎをしゃがむ事で回避し、手刀を殺人鬼の喉目掛けて繰り出す。

「だから！　俺はマゾじゃねえから意味がねえって言うてんだろお

「があー!!」

言葉を崩した殺人鬼は突きを首ごと、頭を左に少し横移動にさせる事で避ける。

そして、空いていた左手で菊知の右わき腹を掴む。

「ぐっ……!!」

怒りで攻撃が単調になっていた菊知は、殺人鬼の攻撃を許してしまい、苦痛の声を上げる。

「つ・ぶ・れ・ちまいなああ

!! って、名言は

どーよ!？」

左手に力を込め、菊知の右わき腹を握りつぶしていく殺人鬼。

「ッ……ッ……!!」

声にならない激痛。

繰り出した手刀はゆっくりと空をさ迷う。

確実に、骨が何本か潰された。

それでも菊知は距離を取ろうとは思わなかった。

「（此処で殺す）」

その意思はとても固かったから。

「あ……ああ……ああああああああ!!」

悲鳴を上げながらも、頭を振り上げ、殺人鬼の頭と打ち合わせる。

「きゅぺっ!？」

ム力つくほど可愛らしくない声をあげ、殺人鬼の左手がわき腹から離れる。

横薙ぎを繰り出した後、元に戻っていなかった右腕は、もう戻っている。

数歩、後退し、再び、鉄骨の横薙ぎを繰り出すべく構えるが、既に菊知は目の前に迫っていた。

止めを刺すべく、菊知の手刀が未だに対応出来ない殺人鬼の

大声が街すら覆った。
当然であろう。

この街の住人、全員が同時に発した声だから。

「……!?」「……」

その声に反応し、動きを止めたのは灰野家の三人。
夢や智樹が気絶させたのは20人ほど。

それ以外の街の住人、全てが同時に絶叫したのだ。
驚かないのも無理は無い。

同時に、街の人々は慌てふためきだし、首のみを世話しなく回し始める。

「な、何事……なの？」

「わ、わかんない……」

さつきまで、街の住人をバツバツと気絶させていた双子も、
流石の事態に首を傾げている。

「一体……ッ！」

菊知も同様に、攻撃を止め、辺りに一瞬だけ気を配ったが、それが
いけなかった。

「GO・TO・ヘヴン
しゃー!!」

じゃ、つまんないか。死に曝

菊知を鉄骨の横殴りで、床が途切れる直前の所まで吹き飛ばす。

地面に横立っている菊知は、あと少し下がれば、地面まで一直線
に落ちるであろう。

「キイ兄!!」

双子が急いで、兄のもとへ駆け出す。

「だが……それは間に合わなかった。何故ならば、殺人鬼の方が双子よりサブキャラに近いからだ……って、ナレーションが付きそうな場面だよなあ!!」

その言葉通り。

殺人鬼は鉄骨を振り被ったまま、天井近くまで飛んだ。

結構、自分を殴ってくれたサブキャラを重力を加えた一撃で粉砕するため。

「く……」

菊知は、立ち上がりはせず、身体の向きを殺人鬼の方へと向ける。そして、懐から筒状の物体を取り出す。

「ば、爆弾とか!? 自爆ツスか!?!」

勝手に想像し、慌て始める殺人鬼。

されど、既に空中に居るため、菊知の側に着地しない限りは避けることも出来ない。

「貴方が空中に居れば……街の人たちに当たる可能性も極端に下がりますからね……」

菊知は取り出した水筒の水を空中に散開させ、空いている方の手の指で輪を作る。

「喰らいなさいッ……!!」

そして、殺人鬼目掛けて放つ。

と言っても、今回は腹部や腕などではない。

「！！元ネタわつかるっかなああああ！！？」

やはり吸血鬼なのだろうか。

潰された目が、もう回復した殺人鬼は落ちていく最中、態勢をうつ伏せから仰向けへと変える。

「こおおのおおおまああまあああ！！ 死んで！！ たまるかってーの！！ こーゆー台詞は主人公の仲間が絶体絶命の時に言う台詞だよねえ~~~~！！」

そして、右手に持った鉄骨を振り被り、灰野家の三人目掛けて投げつける。

「！！二人とも、避けて！」

振り被った時点で、それを察知した菊知が二人を抱きかかえる様に、床の方へと倒れこむ。

「え？ 大丈夫だよ。キイ兄」

「だって、ほら」

しかし、双子は平気な顔で、兄の腕の中から飛び出ている手で、外を指差した。

「え……？」

首だけ振り返り、菊知もその光景を目にする。

鉄骨は、灰野家が居る階を通り過ぎ、屋上へと飛んでいってしまった。

「何でやね~~~~ん！！ 最近、俺は関西弁にハマっているのだろ

うか……うわツらばツ!!」

遙か下の方だが、殺人鬼のそんな声が聞こえた……ような気がした。

「……ふう。とりあえず、こっちは終わりましたか……」

双子を抱きかかえたまま、菊知は安堵の溜め息を漏らす。それと同時に智樹が叫ぶ。

「あっ！ キイ兄！ アレ!!」

再び、外を指差す智樹。

「ん？ どうしましたか？」

ようやく痛みが回復してきた菊池は、またも首だけ振り返る。

そこには、全身から白い光を放つ康介が香奈を抱えて落ちていく光景が見えた。

第十話「魂の意思に関係なく分裂した日」

暗黒が支配する時間。つまり夜

ガチャ……

屋上への扉を開けるのは、走つたために息を切らした康介。走ってきた理由は、幼馴染が連れ去られたため。何故、連れ去られたか？それは、今に分かる。

「ようこそ。異なる者よ」

建設途中のビルの屋上。

赤い鉄骨が柱の延長線上に剥き出しで飛び出ている。天井など、当然なく、落ちないようと設置させる鉄柵などもない。

正真正銘の絶景が見渡せる場所。

其処に、ソイツは居た。

康介に背を向け、暗い街を見渡す様にして立っていた。

深い緑の色をした、肩にかかる程度の長さの髪。

数十本ほど、纏まった前髪が曲線を描いて自己主張をしている。いわゆる「アホ毛」って奴だ。

漫画の博士が着るような白衣に身を包み、ソイツはゆっくりと振

り返る。

赤い瞳が吸血鬼である事を語っている。

「私の名前は『リミー・デイジョン』とつくにお気づきかもしれないが吸血鬼だ」

両手を肘の高さまで上げながら、リミーは康介に近づくために歩いて来る。

背後には香奈を攫った20代後半の男が、その香奈を抱えて立っていた。

「……貴方の目的は何ですか……」

香奈の無事に安堵の息を漏らしたかったが、この街を変な風にした張本人が目の前まで迫ってきていたために、睨みを崩さずに尋ねる。

「目的かね？ 今の目的は……君の正体を知りたいだけだな」

康介と息がかかるぐらいまで接近したリミーは顔を康介の目の前に持つてくる。

普段の康介ならば、怯えてしまう所だが、香奈が攫われている手前、そんな事は出来ない。

「俺の……正体……？」

その聞きなれない言葉に、康介は首を傾げる。
無論。睨みは解いていない。

「そう。君の正体だよ」

顔を康介の顔から離し、リミーは語りだす。

「私は吸血鬼だ。同時に、私は“魂”を操れる吸血鬼である」
右手の人差し指を天に向かって刺し、リミーは説明を始める。
康介の「魂を操れる……？」と呟いた疑問など知った事ではない
と思うように。

「私は自らの魂を“分裂”させ、他人の身体を乗っ取る事が出来る
のだよ」

「もちろん。無条件で乗っ取れる訳ではない。乗っ取る際には、そ
の身体の持ち主である魂と精神勝負を行うのだがね」

「だが、並みの人間の魂が私に勝てるはずがない。まあ、こちらが
負けても、「リミー・デジョン」という吸血鬼が、この世界に存
在する。という情報を渡してしまっただけなのだがね。当然。そうな
った場合は、その人間を殺すが」

そう一気に語り、リミーは右手を下ろす。

そして一息。

「……それで、この街の人たちに違和感があったんだ……」
康介は少し前から感じていた“何か”の正体がリミーであった事
を悟る。

と、リミーは腕を軽く上げ、再び話し出す。

「支配した人間は私の意のままに操作可能。だが、支配した人間の、
それまで得た知識や情報、記憶を見る事は出来ない」

「だが、支配した後に“視認”した物は、私も視認出来るようにな
る」

「そうして……私の支配が効かなかった君達の情報を得た」

腕を下ろし、またも一息。

そして、康介に向かって指を差す。

「黒坂 康介。夢野 香奈。灰野 菊知 智樹 夢」

「この五人は、私の支配が効かなかったのだ!!!」

ここで感情的になり、リミーの語りは止まる事を知らなくなる。

「灰野の三人は分かった。先ほどの貴様との会話でな。ダンピールだったとは。それでは、私が精神勝負で負けて当然だ。ダンピールとなった人間は、吸血鬼となる力に打ち勝った人間だからな」

「夢野 香奈。コイツは一度、私の支配を受けた。だが、その支配を逃れた！ 何故か？ これも分かった！ コイツは極稀な「人間になれる吸血鬼」だからだ！ 精神勝負で勝つたとしても、吸血鬼に戻っては支配からも逃れられよう！ まあ、完全には支配から脱してなかったため、体調が優れないようだがな」

これまた、謎が一つ解けた。

最近の香奈の調子が悪かったのは、リミーのせいだったのだ。

というか、殆ど、この吸血鬼のせいなんじゃない……？

とすら、康介は思えてきた。

「だが、だがしかし！ 黒坂 康介！ 貴様だけは分からないのだよ！ 貴様は人間のハズだ！ 夢野 香奈から吸血鬼の力の一部を貰おうが、その前から私の支配は効かなかった！！ 十二年前も！ 今もな!!!」

「……………え？」

今、この吸血鬼はなんて言った……………？

十二年前……………？

それって……………

「あの忌々しい実験失敗の時だ！ 私の魂分裂は“街”という名が付く場所ならば、何処までも分裂可能だが、それ以上の範囲にはどうやっても広がらない！ だから、範囲を広げるための実験を行っていたというのに…………… 人間どもの魂が暴走。どいつもこいつも、殺戮・破壊衝動に支配され、非常に醜い同士討ちを始めた！」

それ……………じゃあ……………

あの事件は……………

「私はこの“核”となる魂が宿った身体が無事ならば、問題など無いのでな。さつさと逃げ、様子を見ていた。実に滑稽だったな。そして、幼かった貴様を見た」

「私は貴様に興味を持ったよ。何故、私の支配を受けなかったのかとな。そして魂を分裂させ、支配しようと思った所に、あの灰野

菊知 智樹 夢がやって来た」

じゃあ……………あの人は……………

「当然。支配しようとした。が、私は精神勝負に敗北し、自分の存在を明かしてしまった。だが、幸いな事に、実験に失敗した私の魂は本来の力を持っておらず、精神勝負に敗北しても「吸血鬼が居る」という情報しか、あの三人に与えなかったようだ。実に僥倖」

「だが、頂けなかったのは、菊知が気絶した貴様を連れ、隣町に行ってしまった事だ。どうやら貴様を病院に運んだらしいな。お陰で、貴様の支配が出来なかった。だが、菊知の後を追ひ、私も隣町へ向かった。そこで力が戻るまで休んだ」

「この街は実に不思議でな。私の力もすぐに戻った。そして、私はこの街を支配した。当然、夢野 香奈も支配した……が、貴様だけは、貴様だけは支配出来なかった!!」

「何故だ!? 何故なんだ!! 黒坂 康介!! 貴様は一体、何
m「あああ……うあ……」の……」

康介に指を差し、熱心に語り、我を、辺りを忘れていたリミーだったが、康介の怯えぶりを見て、冷静さを取り戻す。

「そうだったな。貴様は、あの事件で絶対的なトラウマを抱えていたんだっただな。その張本人が、今、目の前に居るとなれば、怯えもするさ」

「フツ」と鼻で笑い、康介を見下すりミィ。

康介は腰を抜かしてしまい、立ち上がる事も容易に出来なくなっていた。

「あう……うあ……あ……」

康介の脳内に呼び戻される、あの時の記憶。

血が大地を。空を。木々を。街を。人を。そして康介を覆っていた。

それを引き起こしたのは、灰野 菊知だとばかり思っていた。だが、実際は違った。

目の前に居る「リミィ・ディジョン」こそが元凶だったのだ。しかも、単なる「実験」のためだけに、引き起こされた事件。

「恐いかね？ 恐ろしいかね？ 怯えるかね？ 実に滑稽。本当に愚か。人間はこれだから嫌いだ。早く全人類を支配し、私の安息の地を作りたいものだ」

安息の地を得る。

何気ない一言だが、これこそが「リミィ・ディジョン」の目的。全人類を支配し、安全を確保する。

それだけのために、リミーは実験を繰り返してきたのだった。

と、そこでリミーは誰かと話すように喋り始める。

「そうだな。こちらも大方、片付きそうだ。良いだろう」と

康介は、そんなリミーの言葉にも反応出来ない。

「どうやら、下も面白くなってきたようだな……おっと」

またリミーは一人で喋り始める。

「本来ならば拳銃がベストだが……生憎、警官は最下層だな。我慢してくれ」

それだけ言い、リミーの意識は再び、康介の方に向く。

が、当の康介は俯いたまま、身体を震わせるだけ。

「……下らない。いつまでもそうしてるが良い。私は先に、夢野
香奈の始末でもしよう」

そう言っつて、リミーは康介から離れ、香奈を抱きかかえている男
の下へ向かう。

「え……？」

ここで、ようやく康介が反応を示す。

ピクツと身体を動かし、頭を上げる。

「今……なんて言った……？」

恐怖で全身を支配されたためか、康介は腰を抜かしたままで聞く。

「夢野 香奈を始末するのだよ。私の存在を知られたからな。その
後は君だ。後は、灰野の三人もだな。本当は、下に居る殺人鬼に頼
みたいのだが……奴の実力では不可能だろう」

そうして、リミーは男から香奈を奪い、抱きかかえる。

「そ……んな……」

康介は身体を小刻みに揺らしつつも、立ち上がる。
そんな康介を見て、リミーは不思議に思う。

「何故、立ち上がる？ ああ。逃げるためか。醜い人間には相応しい行動だ。だが、無駄だな。この街の住人は私の支配下にある。逃げられるわk「事は……させない」……何？」

「そんな事は……させない……って、言ったんだ……！」

康介が立ち上がり、一步一步、リミーに向かって歩き出す。

「先ほどまで震える事しか出来なかった人間風情が何を言う」
リミーの言葉が言い終わると同時に、リミーに香奈を渡した20代後半の男性が、康介に殴りかかる。

「うぐっ！」

無防備な康介に加えられる腹部への一撃。

康介は膝を付き、腹部を右手で押さえる。

そこに男の追撃、頭部への肘撃ちが襲い掛かる。

「やはり人間か……む？」

康介の身体能力が人間並みである事を確認したりミーの下に、再び下からの応答が求められる。

「先ほど、黒坂 康介に話したばかりだ。二度も同じ事を言うのは面倒だ」とだけ返事をし、リミーの意識は殴られ続ける康介に向けられる。

「ぐ……くう……！」

亀のように身体を縮め、攻撃から身を守っている康介は、リミー

から見たら滑稽以外の何者でもなかった。

「滑稽。では、そろそろ夢野 香奈を突き落とすか……」

リミーは夢野 香奈を右手一本で肩を抱くように持つ。

右腕を香奈から離せば、香奈は背中から自動的に落ちていくようにしながら。

そうした後で、リミーは溜め息を吐く。

「やはり……ダンピールだけある……」

「気絶させる気か。良いだろう」と呟き、その数十秒後には「やるな……総攻撃でお相手しよう」と返事をせざるを得ない状況に、下がっている事を把握した。

その間にも、康介は一方的な暴力を受け続けていた。

香奈を助きたい気持ちもあるが、一方ではリミーに対する恐怖も残っている。

いや、どちらかというと、未だに恐怖の方が強い。

そのため、身体が動かない。

現在、受け続けている暴力よりも、リミーの恐怖の方は大きい。

香奈……香奈、香奈……！！

心の中でそう叫ぶが、香奈には聞こえない。

そこで香奈の方を見ようと頭を上げる。

すると、リミーが香奈を落とそうとする恰好でこちらを見ていた。康介がこちらを見ている事に気付いたリミーは顔をニヤつかせる。

その時

まずは康介を殴っていた男が吹き飛んだ。

屋上へと続く扉の中へと吹っ飛んでいき、その勢いで開けっ放しだった扉が閉まる。

幸い、階段付近には壁が設置してあったために、男は落ちずに済んだ。

妙な作りである。

次に白くなった。

康介の身体が。

全身から白い光を放ち、全身にあった傷を癒し、オーラとも取れるエフェクトを放ちながら、康介は立ち上がった。

その目は確実にリミィを睨みつけていた。

意味不明。

理解不能。

何がなんだか、理解出来ない。

私は科学者だ。

何故、理解出来ない。

理解したくない。

したくない？

訳が分からない。

そこで、あの絶叫が放たれた。

「香奈を離せ。吸血鬼」

康介が、そう話す。

その威圧感。全てを圧倒する勢い。

だが、静かな勢いであった。

「ぐっ……くう……」

僅か一瞬で立場逆転。

いや、何故、立場が逆転している……？

何も変わっていない……！！

アイツは白くなっただけ！ そう！ 白くなっただけだ！！

これで支配が効かない理由も分かった！

白いからだ！ 白いから効かないんだ！ いや、人間じゃないからだ！

ああ。納得！ 納得だ！！

だが……だが、何だ！？

この敗北感は……！！

大丈夫だ……！！

夢野 香奈がこちらに居る限りは、私は絶対大丈夫だ……！！

心の中で混乱を沈めさせ、リミーは言う。

「い、嫌だと……言ったら……？」

格下と見下していた相手に対し、言葉を嚙んでしまった事を、リミーは後悔した。

しかし、今はそんな場合ではない。

「お前を倒す」

決意の籠った目で、康介はリミーを睨む。
ずっと睨み続ける。

もう康介のトラウマは消え失せていた。

今の康介を支配しているのは「香奈を助ける」という気持ちのみ。

「」……の……」

何か言おうとしても言えない。

喋りたいのに喋れない。

下手な事を言ったら、確実に倒される。

そんな不確かだが何処か現実味を帯びている不安に駆られるリミー。
！。

そんな時、リミーの背後……下の方から声が聞こえてきた。

「「おお……まああ……！ 死……！ ……る……！ ……！ ……！ ……」
台……の仲……絶命……だね……！」

「ぬ………？」

聞いた事のある声に首だけを僅かに振り返らせようとした。

その時。

下方から飛んできた鉄骨が、リミーの腹部を貫いた。

「ギッ……!!」

声にならない声をあげ、仰向けに倒れていくリミー。
そうなれば当然、背後は重力の流れに沿って、落ちていく訳で。
もちろん。リミーに支えられていた香奈も。

「ッ……香奈ッ!!」

走り出した康介は、落ちる事も構わずに、床を蹴り、外へと飛ぶ。
そして、香奈を抱きしめ、共に落ちていく。

地面が近づいてくる。

このままでは二人とも地面に激突し、潰れたトマトのような惨状を曝してしまっただろう。

「香奈……」

康介は腕の中で、今も気絶している香奈の顔を見つめ、ギュッと抱きしめる。

そして、左手の平を地面に向ける。

本当にそれだけ。

本当にそれだけなのに。

地面にぶつかる直前に、康介たちは一瞬、止まった。

それから地面に着いた。

勢いづいた衝撃は、空中で止まった際に全てリセットされ、その後、再び生まれた衝撃では、人は殺せなかった。

むしろ水晶玉さえも割れはしないだろう。

そして、康介と香奈は地面に着地した。

だが、さすがに左腕一本では、直立不動など出来ず、康介は背から地面に倒れこむ。

腕の中の香奈が傷つかないように。

「ふう……」

軽く一息。

天を仰ぎ見る。

気がつけば、輝いていた星と月は徐々に姿を薄めていた。側には香奈の顔。

一応は、解決……かな？

一日ほど続いた康介の非日常は、とりあえずの形で、終幕を迎えようとしていた……

第十一話「終わって始まる」

微妙に朝日が昇ろうかな？　と思っている時間帯。それ即ち早朝

「貴方が……十二年前に、あの地獄から俺を救ってくれたんですね」
未だ気絶している香奈を抱えたまま、膝立ちの康介は告げる。
その視線の先には、ビルから出てきた灰野家三人が立っている。

「ようやく誤解が解けましたか……いやいや、何よりです」
灰野家三人の内、兄である菊知は狐目のまま、微笑む。
その兄に合わせて、双子である智樹と夢も「えへ〜」と笑う。

「でも……香奈は殺させないよ……」
だが、厳しい視線と険しい表情に戻った康介の目には「香奈を守る」という決意に満ちていた。
そのせいか、言葉遣いまで変わっている。
その決意を打ち砕こうとする者には、一切容赦しない目で。

お互いに無言。
やがて菊知はキョロキョロと辺りを見渡し始める。

そうしている間に朝日が差し始め、陽光が五人を包み込む。
陽光に包まれた香奈を見た菊知は驚きながらも、頭を下げる。

「……それについては失礼しました」
「んゆ……ゴメンナサイ！」

「キイ兄は“吸血鬼”にだけ怖い人なの！　だから、許してください
いー！」

またもグルグルと兄の周りを走り始める双子。
兄も「やれやれ……」と言いながら、何か思い出したように、双子に一つの命令を下す。

「そつだ。智樹。夢」

「んい？」

「なに？ キイ兄」

菊池は双子の肩に手を置いた。

「この街の人々を、このビルから出して置いてくれませんか？ 流

石に目が覚めて、この中じゃあ驚くでしょうし」

兄の命令に双子は大きく頷き「はぁーい！」と返事をし、ビルの中へ駆けていった。

「さて……では、次の疑問を解決しましょう」

双子を見送った後、菊知は振り向いて、康介を見る。

その狐目が僅かに開かれる。右目だけ。

康介の表情に、緊張が走る。

「康介さん。貴方は何者ですか？」

それは屋上でリミーが発しようとした言葉。

リミーの支配を受けず、天津さえ、身体が白く光るなど、もはや

人ではない。

しかし、康介にその疑問に答える術は無かった。

「それは……俺にも分からない……です。ただ、香奈を守りたいと思っただら、身体の中から何か……力が湧いてきて……」

多少、俯きながらの回答。

それが、今の康介に分かる全て。

「ふむ……嘘ではないみたいです……まっ、良いでしょう」

菊知はさして気にせず、次の疑問に移る。

「では、次に。貴方は屋上でリミーと名乗る吸血鬼を倒しましたか？」

菊知にとって、もっとも重要な質問。

彼は元々、吸血鬼を殺すために、こんな事をやったのだ。

しかし、今では、ずっと感じていた吸血鬼の気配を感じない。

「いえ……リミーは、香奈を落とそうとしたんです……下の方から鉄骨が飛んできて、リミーを貫いたんです。それで、香奈と一緒に落ちて……そこからは……」

あの子の康介は香奈を助ける事で頭が一杯だったために、他のことを考える余裕など無かった。

しかし、言われてみれば、リミーは落ちたのだから、そこら辺に死体があるだろうと思っていた。

だが、そんなものは何処にも無い。

地面は全く綺麗であった。

血が飛び散った後やバラバラになった死体など、一つもない。

「え……あれ……!？」

菊知がさつきから辺りを見渡していた原因は、これであった。

リミーも、ついでに殺人鬼の死体もない。

そうになると、まだリミーも殺人鬼も生きているという事になるのだが……

「気付きましたか？ リミーの死体はありません。あと、先に落ちた殺人鬼の死体も。ですが、私がこの街に居る間、ずっと感じていた吸血鬼の気配が消えました。多分、死んだという事になるでしょう。日光にでも当たって」

「あ、そう言えば……リミーは言ってたっけ……『私は精神勝負に敗北し、自分の存在を明かしてしまった。だが、幸いな事に、実験に失敗した私の魂は本来の力を持っておらず、精神勝負に敗北しても「吸血鬼が居る」という情報しか、あの三人に与えなかったようだ。』って……」

「ふむ？ 実に興味深い話ですね。全ての片付けが終わったら、じっくり聞きたいです」

菊知はそう言って、双子の手伝いをするために、ビルの中に戻っていく。

「では後ほど。片付けが終わりましたら、我が家へ招待しますよ」

「……なんだかなあ……」

何処か、腑に落ちない終わり方に「ご都合主義……」という、作者にとって恐ろしい言葉を呟いた康介。

「んん……康介え……」

よく見れば、香奈は気絶から睡眠へと変わっていた。

「……ハア……ようやく解決かな？」

溜め息を吐いた康介を、雀たちが見ていた……

「うわわ！ キイ兄！ 腕が取れちゃった人はどうしよう!？」

「むむ……急いで病院に運びましょう。医者の方は早めに運んで下さいね。目を覚まして貰わないと」

「「りよゝかい!」「」

「……あらあらあ？？」

広々とした部屋。

赤い絨毯が敷き詰められた床にポツンと置かれた机。

その机とセットであった回転式の椅子に座って、回っている女性。首を傾げながらも、天井を見つめ、何やら独り言を呟いている。

「リミール……死んじやったみたいね」

クスクスと微笑みながら、椅子を止め、視線を天井から変えずに言う。

「一応、クロウや他の奴らに連絡してちょうだい。あと、拓海はそこから辺に置いといてね」

すると、話しかけていた空間が揺らぐ。

だが、すぐさま揺らぎは消えていく。

「全く……まあ、死んで当然かもね。生きてたら、私が殺しちゃったもの……」

小悪魔的な笑みを浮かべ、彼女は再びグルグルと回り始める。

そこで「コンコン」という部屋のドアをノックする音が聞こえて

きた。

控えめな音であったが、女性の独り言以外には何も音が無い空間。そんな静寂を乱すには、十分な音量であった。

女性は「はいはい」と能天気な声で返事をする。

「ガチャ……」というお決まりの扉が開かれる音と同時に入ってきたのは眼鏡をかけ、正装をした女性。

しっかりとした身だしなみは、一目で彼女が「委員長タイプ」である事を連想させる。

そんな委員長タイプの女性は、椅子でグルグル回転している女性に、軽く会釈をして、一言。

「社長。お時間、宜しいでしょうか？」

「あ……あ……くけけけけけ。ゆたたたたた。みききききき。るにににににに」

何やら、色々と散らかっている部屋で自分の右頬を右手で引つ張りながら、左手は本を開き、目は本の内容に通している男が居た。

その発している言葉の内容は本に書いてあるものではない。
微妙に、言葉を発する際に音程を変えているのが判る。
しかし、そんな事をする意味など無い。

「あ……ダメだわ……にゅい？」

そんな男の背後の空間が揺らぎ、男はその揺らいだ空間の方に顔
だけ向ける。

「うい？　くい？　むむにゅ？　死んだ？　あのリミィが？　がが
がが？　りよかい」

質素に「死」という単語を無表情のまま呟く。
実に興味の無さそうな声色で。

そんな感じで適当に頷き、空間の揺らぎに別れを告げる。

「死んだかあ……くあせふじにいこにげみかなつあだ……やっぱダ
メだわあ……」

最後に溜め息を吐き、意味不明な言葉を発するのをやめる。
今までの間、ずっと右手は右頬を引っ張っていたままだったが。

「くふふ……スーラ。こんなに張ってしまつて、イケない子だね」

「ふわっ……！ んもう……キールはイジわるです……」

「ふふふ……恋愛とは得てして、その様な時もあるんだよ……って、ん？」

薄暗い部屋の中。

一人のシルクハットを被った男性が、うつ伏せに倒れたクリーム色のポニーテールをした女性の上に乗し、背中を押していた。

マッサージのようである。

そんな男性の近くの空間が揺らぎ、すぐに消える。

「ふむ……リミーが死んだ様だね」

「え……ふええ！？」

シルクハットの男性の一言に、ポニーテールの女性が首を男性の方に振り向かせる。

そしてすぐに自分の持っていた茶色の表紙の本を開き、中身に目を通す。

「あ、本当です……久々の更新で、何か、白くなれる人間っぽい男の子と人間になれる吸血鬼の女の子。ダンピールの男とその弟妹きょうだいの双子やらに殺されたみたい」

そのポニーテールの女性は、自分が全く見ても居ない事なのに、全てを正確に把握していた。

そんな熱心に本を読むポニーテールの女性の声に反応するのはシルクハットの男性。

「ああもう！ そんな声を出すスーラも可愛いよ！」

「ふ、ふみやあ……ふみい……」

シルクハットの男性……キールはポニーテールの女性……スーラの頭を撫でる。

その行動にスーラは顔を真っ赤にしながら、顔を戻し、そのまま持っていた本で顔を隠してしまう。

「くふふ……では、クロウからの召集がかかると思うし、すぐに支度をしようか」

軽く笑い、キールはスーラの背中からどき、立ち上がる。

「ああ……」

それを名残惜しそうに見つめたスーラも、渋々、立ち上がる。

「ふふつ……終わったら、たくさん可愛がってあげるよ」

「あ……う、うん！」

「ああもう！ 本当に可愛いんだから！」

「ふみい！」

立ち上がったスーラの頭を両腕で抱き込み、頬擦りをするキール。スーラの顔は真っ赤で、破裂しそうであった。

「ふむ……了解しました」

黒い包帯で目の部分をグルグル巻きにした男性が、縦に長い机の端に陣取りながら、呟いた。

暗く巨大な部屋。

その男の側の空間は揺らぐ。

その言葉に反応するように、その巨大な部屋の扉の一つが開き、狐目の男性が入ってくる。

「ん？ どしたー？ 誰か死んだかー？」

実に能天気な声で歩きながら、黒い包帯男に問う。
それに対し、黒い包帯男は静かに頷く。

「そうですね。リミーが死んだとの事です」

両手を組み、両肘を机に付き、組んだ手で口を隠した状態で男は言った。

その言葉に、狐目の男性は少々の驚きを含んだ表情をし、嫌味を含んだ笑みを見せる。

綺麗に整えられた八重歯だらけの歯が口から姿を見せる。

「冗談だったのによ……マジにあのマッドサイエンティスト。死んだしまったのかよ？」

それでもリミーの「死」を悲しむ事など無く、すぐに踵を返し、部屋を出て行くこととする。

「んじゃ、アイツにも教えてやっかな。意味ねえけど」
そんな言葉を残して。

扉の閉まる音がし、一人残された空間で黒包帯男は呟く。

「では、アンナさんに「全員集合」とお伝え下さい」

それだけ聞いた空間の揺らぎは、縦に一回、頷くように揺らぎ、

消え去る。

男は手の組みを解除し、背もたれに身を任せ、頭を背もたれの上に乗せ、天井を見やる。

「さてさて。四つ目が実行されるんでしょうかねえ……」

「え？ 小之宵街このよいがいですか？」

金髪ツインテールで、非常に豊満に発達した身体を持つ少女が呟いた。

「そ。そこで『組織』の『中間管理』の一人「リミー・ディジョン」が死んだとの情報が入ったわけ。で、お前に其処に行ってもらって、リミーを殺した奴を見張るなり、接近なりして欲しいわけ。だとよ。銀髪のショートヘアーの青年が、そう答える。

赤い絨毯が轆かれた巨大な廊下。
天井は見えないほど高く、壁には幾つもの絵画が掛けられている。
そんな廊下で、会話をする二人。

「本当ですか……？ その情報……」

ツインテールの少女は疑り深く、その情報を疑う。

「マジもマジ。大マジ。ほれ、さっさと行けよ。あ。あと、「アドレク」とアイツの部下の……」

と、そこでいきなり、銀髪の青年が壁を拳で叩きつけた。

巨大な音が廊下中に響く。

しかし、驚くべきは壁に穴が開いてしまったことだ。

それも小さい穴ではなく、クレーターが出来る程の勢いで。

「ムカつく……」

銀髪青年はイライラを隠しもせずに、左手で髪の毛を掻き回す。

「ハア……分かりました。だから落ち着いてください。兄さん」

ツインテールの少女の兄「銀髪青年は「悪いな……」と謝罪し、言葉の続きを言う。

「『ラン』も付いていくそうだ……」

自分の言つべき事を伝えた銀髪青年は、その場を去ろうとする。

「あ。そうだ」

そして唐突に、何かを思い出したように振り返る。

「はい？」

その言葉に兄に背を向け、歩き出そうとしていたツインテールの少女も首を向ける。

に敷き詰められた。というべきであらう。

その上で笑っていた。

ずっと。

ずっと

幸せな終わりには「終幕」を。

非日常には「開幕」を。

主人公には「頑張り」を。

メインヒロインには「上に同じく」を。

兄には「力」を。

双子には「変わらない」を。

黒い翼には「覚醒」を。

影には「愛情」を。

人形にも「愛情」を。

不死身には「狂気」を。

眼には「眼球」を。

復讐者には「殺戮」を。

姉には「弟への溺愛」を。

殺人鬼には「日常」を。

魂には「擬似」を。

妹には「恋愛」を。

真面目には「優しさ」を。

異常には「哀しみ」を。

最悪には「ようこそ。いらっしやいました」を。

恋愛には「ごきげんよう」を。

天使には「どうもどうも」を。

吸血鬼には「今宵も、お楽しみ下さいませ」を。

読者の皆様には「ありがとうございます」を。

クレイジー！ 第一部 完

第十一話「終わって始まる」(後書き)

ここまで読んでくださって、誠にありがとうございます。

次回より「番外編」なるものを書いていきますので、そちらも是非、読んで頂けたらと思っております。

作中にも述べましたが、読者の皆様方に最大の「感謝」を。
失礼致します。

番外編 「過去 黒坂康介」 (前書き)

今回からは各キャラクターによる番外編です。
お楽しみ頂けたらと思います。
では、どうぞ。

番外編 「過去 黒坂康介」

十二年前

小之宵街の隣町

あかい
あかい
あかい

目に見える全てがあかい

月はあるなにも白いのに
空はあるなにも黒いのに

ぼくの周りにはあかい
あかい
あかい

だけど、黒くなっていく
なんだが、すごく眠い
ねよう。すごく眠い

「おや……？」「この子は……」

……？
だれ？

大きい人

ぼくよりもずっと大きい人

「安心して下さい……私は吸血鬼などではありませんから……」
きゅっけつき……？
きゅっけつき……？

ぼくはそこでねてしまった

「む……気を失ってしまいましたか……」

腕の中で気を失った子どもを見て、菊知は周りに散った双子を呼び戻す。

「智樹！ 夢！ 緊急事態です！」

敬愛すべき兄の一言。

誰のどんな一言よりも温かく優しい一言。

そんな言葉の内容はどうであれ、双子にとって「兄が発した」という事実さえあれば、それは温かく優しい言葉になるのだ。

「はあい！ 呼んだ？ キー兄！」

「夢ちゃんも到着！」

全てが血塗れ。

血で支配された地であっても、双子はその元気を失わない。

「まだ生き残っていた子どもが居ました。二人で小之宵街の病院まで運んでくれませんか？」

双子は、兄の腕の中で気を失っている子どもに、多少の嫉妬を抱いたが、すぐに兄の頼みを聞くために、行動を開始する。

「了解！ この子を小之宵街の病院まで運べば良いんだね？」

「簡単らくしよー！ 夢ちゃんと智樹に任せてよ！」

右手で拳を作り、胸をトンと軽く叩きながら、得意げな表情を浮かべる双子。

兄は、そんな双子の頼もしさに「フフツ……」と優しげに微笑み、子どもを双子に預ける。

「じゃあ、任せましたよ。私はもう少し、この辺りを探してみます」

「はいっ！ 気をつけてね！ キイ兄！」

「そーだよ！ まだ何か居るかもしれないんだから！」

夢の口から放たれた「まだ何か居るかもしれない」という言葉。

これは、灰野家の三人がこの街に来た瞬間に味わった「身体の内側で、何かと何かがぶつかり合う感じ」を示していた。

最初は「見えない敵の襲来か」と思ったのだが、すぐに動悸に似た感じが収まり、結局、何も無かった。

「分かっていますよ。それよりも、智樹と夢はその子を落とさないように」

「大丈夫だよ！」

「そうだよお！」

プクーツと頬を膨らませながら、双子は反論する。

今度はイジらしい笑みを浮かべた兄は、「では、病院にその子を

送った後は、家に帰ってなさい。お菓子が用意してありますからとだけ述べ、双子に背を向けて歩き出した。

「むう……微妙に意地悪キイ兄だね。夢」

「そうだねえ。智樹」

双子はそんな兄の背中を見送り、すぐに自分達も目的地へと足を進める。

その様子を、街から少し離れた森の中で観察していた者が一人。自己主張の激しい「アホ毛」を右手で弄りながら、双子が向かった先に目をやる。

「何なんだ……？ アイツらは……。精神勝負に勝った上に、私の精神勝負すら受け付けなかった子どもを攫って行くなど……。屑が」
アホ毛を限界まで下に引っ張り、そこで離す。
すると元の位置に戻ろうとするアホ毛は勢いよく、上に向かって跳ねる。

そして、元の位置に戻ったアホ毛を再び、下に引っ張る。
そんな事を繰り返しながら一人でブツブツと呟いていた男だったが、やがて双子の向かった先へと、自分を歩み出す。

「まあ良い。アイツらが喋っていた「小之宵街」という所で、実験

再開といこうか」

男……「リミィ・ディジョン」の浮かべた表情は、何処かしら二
やっいていた。

番外編 「思い出 夢野香奈」

最初に康介を見た時の感想は「この子も私と同じなんだ」だった。

あの頃の康介は隣町で起きた悲惨の事件の直後に越してきたばかりだったから、誰に対しても否定的、拒絶的だったな。

他の子から「あそぼーよー」と誘ってくれても、「あ、ううん……ごめんね……用事があるから……」とあからさまに嘘と分かる言い訳をして、逃げていた。

そんな康介だけど、転校先での小学校のクラス内での評判は悪くなかったから、イジめこそ起きなかったけど……

けど、誰もが康介は「暗い子」というイメージを持ってしまい、あまり遊びに誘わなくなったんだ。

それは康介も重々承知している様子だった。

そんな康介に、私は不謹慎ながらも「親近感」を覚えた。

私もそんな心境だったからだ。

私は幼い頃から「自分が人間になれる吸血鬼である」ことを知っていた。

だからこそ、友達とはそこまで仲良くなれなかった。

友人は居たけど、皆は「人間」であり、自分は「化け物」であることを知っていたからだ。

本当に辛かった。
自分も普通の「人間」になりたかった。

でも、そんな時に康介に出会った。

私とは全く違うけど、何処か似ている子。
境遇こそ違うけど、私は康介と心境が似ていると思っていた。

だからこそ私は康介と友達になろうと思った。

友達になりたかった。

唯一、「親近感」の湧く康介と。
友達になりたかった。

でも、最初から上手くいく訳がない。

最初は私も、他の子と同じように拒絶された。

「康介君？ 私は夢野香奈って言うんだ。宜しくね」
「あ、うん……………」

やはり引き気味だった。
それでも構わなかった。

本当の意味での友達が欲しかったから。

「ねえ。友達にならない？」

「え？ う、ううん……ご、ごめんね……僕みたいな暗い奴じゃ友達になれないや……」

「そ、そんな事はないよお！」

そんな感じで誤魔化されてきた。
ずっと。

結構、長い間……

それから……ある日の帰り道のことだったなあ……アレは。

「一緒に帰ろう！ 康介君！」

「あ、う、う……うん……」

ある曇り空の下校時刻。

私の積極的なアプローチもあってか、康介は一緒に帰ってくれる程度の中になった。

私にとっては大きな進歩だ。

他の友達から「康介君のこと、好きなの？」って聞かれたけど、この時はそんな感情なんて無かった。

ただ、本当の友達が欲しかっただけだから……

「最近の学校とか、どうかな？」

「え？ い、いや……夢野さんも一緒にクラスだよ……？」

「まあ、そうだけど……康介君はどうかなーって思って
そんな他愛もない会話をしていたかな。

あの頃は。

そんな時だっけ。

横断歩道を渡っている最中に一台の車が私たちに向かって突っ込んできたのは。

咄嗟だった。

無我夢中だった。

何も考えられなかった。

私は康介を突き飛ばした。

当然、あの頃の力じゃあ、異性の子を突き飛ばしても、そんなに飛ぶわけではない。

だから私は一瞬だけ「吸血鬼」になった。

眼を赤くして、康介を突き飛ばし、自分もすぐにその場から飛んだ。

幸い、康介は突き飛ばされたショックで目を瞑っていたし、車の運転手も目を瞑っていたようだった。

だから、私の正体がバレることは無かった。

その道に、たまたま誰もいないこともあったお陰でね。

その後、車は道を外れて電信柱に激突。

運転手はすぐに出てきて、私たちに怪我がないか駆けつけてくれたけど。

私たちは無事だった。

ふと康介に目をやると、呆けた感じで私を見ていた。

「ありがとう」とだけ告げられ、その日は別れたなあ……

一人で帰る間に「見られたかなあ……」とか不安になったけど、翌日の康介の態度を見ると、そんな心配は杞憂であったことを知った。

康介はいつも通りに登校してきた。

そして登校してきた際に私に向かって、こう言ったんだ。

「おはよう。夢野さん」

「あ……うん。おはよう！」

それからかな？

康介と私が仲良くなったのは。

後で康介にいきなり仲良くなった訳を聞いたら「人に助けられた
|| 優しくされた。ということじゃないか？ 俺はあの事故の後、人
を信じられなかったし。まあ、一人で勝手にビビッてただけなんだ
けど」だって言ってたかな？

と、まあ……こうして私と康介は仲良くなった。
そうして、私は康介に恋をした。
優しくて恰好良い康介に。

それで現在に戻るね。

うん。康介は鈍感だから、私の気持ちに気付かないけど。

私は頑張るよ。

前は「親近感の湧く友達」だったけど、今は「付き合いたい」って思ってるもん。

惚れた弱みなんだけどね。

それでも、私は康介が好きだから。

康介に尽くしたいんだ。

番外編 「後日談 灰野菊知」

建設途中のビルでの死闘が終了してから5時間後。
簡単に言うなら、昼間。

小之宵街の東側にはビル郡が聳え立つ。
その中の殆どはデパートなり、どっかの企業のビルだったりする。
しかしながら、マンションもその中に含まれていたりする。
そのマンションの内の一つ「カプリツチオ」の最上階に「灰野
菊知 智樹 夢」の三人を暮らしている。

現在、康介と香奈は、そんな灰野家にお邪魔していた。

「ようこそ。我が家へ。狭い所ですが、お寛ぎ下さい」
そう言い、机を挟んで対に置いてある緑色のソファーに、康介と
香奈を座るように勧める。

「あ、じゃあ……」
「失礼します……」

緊張した面持ちで、康介と香奈はソファーに座り込む。
柔らかいソファーは二人の座った衝撃を見事に吸収し、二人に楽
を提供する。

お見事と称したい。

さて、菊知さんが本題に入る前に、今までの経緯いきさつをご説明しよう。

- 1、 灰野家三人で、街中の人間を建設途中のビルから適当な場所に移動させる。
- 2、 香奈が目を覚ます。
- 3、 康介が香奈に事情説明。
- 4、 灰野家三人が康介たちの下に戻ってくる。
- 5、 香奈、謝罪。
- 6、 菊知「こちらこそ。すみませんでした」
- 7、 双子「ごめんなさい!!」「」
- 8、 菊知。事情説明のために、二人を自宅へ案内する。
- 9、 康介&香奈。付いていく

異常……もとい、以上。

「では、まずは……こちらの事情からご説明します」

康介の正面に座った菊知は、膝の上に置いていた手同士を組み、話し始める。

尚、双子はお客様に出すようにお菓子とお茶の用意をしている。

時折、「智樹」。チョコレートとおせんべえ。どっちが良いかな
「?」とか。

「ん」……両方出しすのは?」とか。

「ええ!! それじゃあ、私たちの食べる分が無くなっちゃうよ
!」とか。

「ああ! そうだった! じゃあじゃあ、おせんべえだね。夢は
チョコレート、大好きでしょ?」とか。

「うん！ 分かった！ おせんべえを出しておくね！」とか、聞こえてくるが気にしない。

「元々、私たち兄弟は普通の人間でした」

遠い過去を語るように話し始める菊知。

その表情には悲しみと懐かしみ、憎悪などが含まれた難しいものであった。

「ですが、とある事件がキツカケでダンピールとなってしまうたのです」

「私たちは、私達兄弟きょうだい妹をダンピールにした吸血鬼を探し、殺す事を目的とし、同時に、私達の様な吸血鬼による犠牲者を少しでも減らすために、吸血鬼を狩っているのです」

実に簡潔に、要点のみを突いた説明。

しかし、話している間の菊知の表情は険しいままだった。

そんな菊知の険しい表情に、康介と香奈は緊張しっぱなしであった。

やがて双子が「お茶とお菓子をどぞー」とテーブルの上に置いたのを気に、菊知の表情もいつも通りの狐目に戻る。

双子は、兄の膝の上に乗っかり、眼を細めて意識を手放そうとする。

菊知の膝の上に智樹。

智樹の上に夢。という構図だ。

そんな夢の頭を、菊知はナデナデと優しく撫でている。
そのうち、夢が「うにゃくん……」とか鳴きそうだが、気にしてはいけない。

「さて……では、次に康介さんと香奈さんの事情を聞かせて貰えませんか？」

笑みを浮かべた菊知の一言に、康介と香奈はお互いに顔を合わせた後、菊池の方に向き直り、一回だけ頷いた。

康介の事情。

「十二年前の事件」

「菊知に救われた事」

「その菊知に対する誤解」

「リミィと対峙している際に、身体が白く輝いた事は自分でも解らない事」等等を話した。

香奈の事情。

「家系が代々、吸血鬼である事」

「自分が“人間になれる吸血鬼”である事」

「実は父方の家系なのだが、香奈の母親も吸血鬼である事から、香奈の母親は「夢野家家系」とは全く関係ない吸血鬼だという事」

これを話した際に、康介は「あつ。そういえばそつだよね……」と自分が、その事を説明されていない事に気付いた。

後は菊知から「私が言うのもなんですが、どうして貴方達はお互いを、そこまで大事にしているのです？」という質問があったのだが、これについての詳細は「思い出 夢野 香奈」でお伝えしていると思うので、省略。

「成る程……やはり心とは難しいものですねえ……」
軽く溜め息を吐きながら、菊知は首のみを回して、後ろの壁にある窓から外の景色を眺める。

最上階だけあって、絶景の眺め……と言いたいが、景色の殆どはビルで埋め尽くされている。

更に、このマンションより高いビルなどいくらでもあるので、とても絶景とは言えない。

「さて、お互いの事情は簡単であります但し、今日はお疲れでしょうから、これでお開きと致しましょうか」

菊知が双子を膝の上に乗せたままで、小声で喋る。

その理由は双子が既に眠っているため。

更に、膝の上で寝られてしまっているため、菊知は動けない。

テーブルの上の御煎餅には殆ど手を出さなかった康介と夢は、双子を起こさないように、静かに立ち上がる。

「すみません……本来なら玄関までお送りするんですが……」

申し訳無さそうに菊知がそう言うのだが、やはり小声である。

「いえいえ。良いですよ。智樹君や夢ちゃんを起こす訳にはいかな
いんで」

「そうですね。今日は頑張った……みたいですから、ゆっくり休ま
せて上げて下さい」

「恩に着ます……また機会がありましたら、是非、遊びに来てくだ
さい」

そんな会話をした後、康介と香奈は菊知に会釈をして、玄関から
出て行く。

残された菊知は殆ど閉じられていた目を薄っすらと開け、気持ちよさそうに眠っている双子の表情を見やる。

「本当、お疲れ様です。智樹。夢」

そして、自らも背もたれに頭を預け、意識を落としていく……

「あ、リミーについて聞くのを忘れていました……」
意外にうっかりさんな菊知であった……

番外編 「白猫を拾った日 灰野智樹&夢」

「じゃあ、気をつけて下さいね？」

狐目の男性が双子をと同じ目線に合わせて、そう警告する。
対する双子は危機感の欠片もなく、元気な返事をする。

「はい！」

「りょうかいだよー！」

眼を細めて、大きく腕を挙げ声も張り上げる双子をにこやかに見守りながら、菊知は二人を玄関から送り出す。

「……………やれやれ。無事なら良いのですが……………」

不安な菊知を他所に、双子は今日も元気にお使いに向かう。
買う物はお魚。

お金とリストは持たせた。

この街の人々に悪い奴らは居ない……………ハズ。

「……………何時までもベツタリ見守る訳には行きませんしね……………私は
私の用事を済ませましょう」

菊知は独り言を呟いた後に、自室へと戻って行った……………

「ねえねえ。夢」

「なあに？ 智樹」

その頃、双子は既に商店街に繰り出してた。別に問題など何も無く、ただ平凡に歩いていただけでたどり着いてしまった。

「今日はおさかなを買ったよね？」

「そうだよ」

数ヶ月前は、とある吸血鬼に支配されていた人々だったが、今ではすっかり元通りの生活をしている。

そんな人々は双子が通る度に笑顔になる。

もはや双子は、この「小之宵街」のマスコットキャラクターとなっている。

見る度に幸せな気分になれるのだ。

日々、ストレスが溜まる世間だが、双子を見る度に癒され辛い現実を忘れられる。

素晴らしいことである。

「じゃあじゃあ！ 今日はおさかなのなんのめにゆくだろうね!？」

「おお！ そういえばそうだね！ なんだろう!？」

『つきつきわくわく』という言葉が似合うまま、双子は手を握り合って魚屋へ向かう。

「おさかなげつとお!」

「げつとお!」

お魚が入ったビニール袋を天高く掲げ、二人はきやつきやつと喜ぶ。

それを見ていた魚屋は「はう。お持ち帰りしたぜえ」などと
言っていた。

買い物客も「わは」とか「神々しいわあ」とか……
結構な人気である。

「それじゃあ帰ろう！」

「帰ろう！」

またも手を繋ぎ、すぐさま帰路に着く二人。

と、そこで夢が一つの出来事に気付く。

「あれ？」

「んにゃ？ どしたの？ 夢」

夢がいきなり止まったために智樹はすぐさま夢の顔を見る。
すると夢は道端に倒れている白猫を指差す。

何かにやられたのか、白猫は酷く傷付いており、息も荒い。

このままでは死んでしまうと直感で感じた双子はすぐさま駆け寄り、白猫を抱きかかえる。

「うにゃ……………智樹い……………この猫ちゃん……………」

「うん……………このままじゃ死んじゃう……………」

泣きそうな表情になる夢を励ますために、智樹は一つの案を出す。

「ん……………そうだ！ 夢！ キイ兄に聞いてみよう！」
「あ！ そっか！ うん！ そうしよう！」
すぐさま白猫を抱え、二人は自宅へとダッシュで帰る。
でも、人並みの速度を保ったままで。

「で……………この白猫を飼いたいと？」
応急処置を施し、白猫は眠りについた。
その手当てを行った本人、菊知は少々の呆れを見せながらも、双子の懸命な御願いに首を捻っていた。

「うん！ ダメかなあ……………？ キイ兄……………」
「この白猫ちゃん！ 飼いたいの！」

思えば、この子たちには辛い思いばかりさせてきた……………
この子たちなら、なんだかんだでしっかり責任持って面倒見てくれるだろう……………

そんな思いからか、菊知はようやく首を縦に振った。

「仕方ありませんねえ……………しっかりと面倒見るんですよ？」

兄のこの言葉に双子はこれ以上ないほどの喜びを見せながら飛び跳ね回る。

「良いの！？ ありがとう！ キイ兄！」

「ありがとうー!!」

「やれやれ……」と喜ぶ双子を見ながらも、菊知の顔は緩んでいた。

やっぱり双子には甘い兄である。

「（しかし……）」

ふと菊知は寝ている白猫に視線を移す。

あの猫は何に襲われ、あんな傷を負ったのか？

確かに、身体は傷だらけだが傷の種類が多過ぎる。

切り傷。引っかき跡。刺し跡。他にも様々。

それを疑問に思いながらも、今は双子を見ることで笑いを浮かべる兄であった。

番外編 「過去を振り返る 殺人鬼」

夜中とは素晴らしいな。え？ そう思わない？ 読者様方。其処は頷いてくださいまし。 そうしないと、この俺の問いかけが丸の中に数字の1+8の答えが入っているのと同じになるではありませんか。つまりバカね。おおう。自分で言ってしまった。今日も早く寝なければ……意外と健康に気を使っているのだよ？ 俺は。

「あつ……ああああ……！！！」

にゃ？ 変な声？ ああ。目の前に酔っ払った素敵かつダンデーなオッサンが夜道を「ぶるああああああ！！」とか言いながら歩いていたので、後ろから襲い掛かって、両足をサバイバルナイフでちよん切ってやったのだよ。オッサンの台詞だけ嘘ですけどな。

「い、痛いいいい……！！ 足が……！ 私の足が……！！！」

う・る・せー 今は心の声で読者様方と話しているんだぜ？
空気嫁や！！ ボケがっ！！ そーゆー奴は閻魔様に舌と耳たぶを煮つけて喰って貰えYO！！

「ん……こーゆー場合はだなあ……」

よし。ナイフをオッサンの上空目掛けて投げて……その僅かしかない柄の部分に俺が着地できる様に飛んでみよう。アイ キャン フライみたいなのりで。ノリは大切だよ。海苔はラーメンに乗せてるですか？ 皆様は。俺は乗せてるよ？ スープにじっくり付けてさあ……

「ぐっ……！？」

何て事を思っている内にオッサンを殺しちゃったZE 可愛く右目だけウインクしてみる。可愛い？ そんな訳ない。オツファ！ 正面否定だぜ……あ。殺害方法はさっき思った通りの殺し方ね。しかし、人間離れしてるなあ……俺。

オツサンの背中に突き刺さったナイフ。
芸術的である。
だって、人間だもの。
俺作。

ふむ……49点。

こんな作品でも半分に達しそうなのが嫌だよなあ……

さて、死体は回収回収。

恐い国家権力に発見されちゃうと、朝一の全国ネットで俺の顔が

即 公開。

「何て醜い顔なんだ……」って、宇宙から人間を狩りに来た宇宙人が人間に素顔を見せた時に、人間に言われる言葉を言われちゃうZE ソイツは困るぜえ……

血は放置。

すぐにバレちゃうが、死体が見えなければご近所さんに精神的シヨックを与えずに済むしねー。まあ、いずれは全員殺しちゃう訳なんですけど。でもさあ、もう結構、殺ってるけど、誰も騒がないんだよねえ。これまた。不思議。

うわあ……さっきの「いずれは全員殺しちゃう訳なんですけど。」の台詞は、確実に願望叶わずに死ぬ奴の台詞だよ……簡単に言えば、敵組織の脇役の台詞（死亡フラグ立て済み）。恐いわあ……

ん〜……死体はテケトーな空き地に穴掘って埋めたから良いとして……

これからどうしようか……遊ぶ？ 友達居ないけど。うわ！ 寂しい奴って思わないで下さい。うううう……読者様方がイジめるよお……！ お姉ちゃん！ って、虚しいわな……

……よし突拍子もなく、あの建設途中の大きいビルから使う予定の鉄骨を何本か貰って来よう！ 勿論。無断でな！ まさに外道。其処、指差さない。指差し。いくない。やめよう。タバコは貴方の身体に害を及ぼします！ って、そんな事を言って、なんになるんだ……まあ、思いついた案は実行しよう。

と、ゆーわけで、建設途中のビルの敷地内に現在、俺は来ていま

す。全国の読者の皆様方。見てますかー？ とかいう前フリは置いておき。

思ったとおりに鉄骨がピラミッド状に積んで御座いますでございまずでゴザイマスよ？ これは俺に「持っていていきやがれ！ こんちくしょー！」って言ってるに違いないツスね。では勝手に持っていくましよう。総重量が1t以上ありそうな鉄骨の山を両手で抱えて持てるなんて、流石、俺ですね。どうみても人間じゃないですほんとうにありがとうございます。

さて、鉄骨を運び終わったZE 使用時間は……ワーオ。腕時計を持ってなかったね。まあ、大体、1時間ぐらいでしょう。多分。気にしては負けです。絶対敗北主義ですよ。さてさて……虚しい一人言葉遊びは終了にしましょう。てか、しよう。

ん……虚しいね。読者の皆様方って、そんな奴ら居ないし。

俺は一人だし。

誰も喋ってないし。

全部、俺の心の声だし。

って、それは最初に自分で思ってたか……まあ、色々複雑なん

デスヨ。この世代の少年はね。少年って歳でもないような気がスル
！。

ただ……殺人を再び始めてから「煩い声が体の中からする」って
いうのは気になるけど。

じゃあ、帰りますかね。

我が家に。

早く帰らないと、深夜アニメが始まってしまっZ E

番外編 「これまでの経緯について リミー・ディジョン」

む？ 私の過去についてかね？

実につまらない質問だな。実に低脳と見た。

何？ 要は馬鹿と言っているのだよ。理解したか？

……………ハア。良からう。その馬鹿さ加減に免じて、話してや
ろう。

私や“クロウ”は「自然誕生」した吸血鬼だ。

生物である以上、親となる個体が無ければ、生物は産まれない。

それは解るな？ 良し。

私とクロウは、それが無いのだよ。

何？ 「ならばどうして産まれたか」だと？

それは最初に言っただろう。ド低脳めが。

「自然に誕生」したのだよ。

経緯など知らん。

文字通り、勝手に産まれたのだよ。

誰かの意思かもしれないがな。

私の知った事ではない。

というのが、私の産まれた時の説明だ。

む？ 「それ以降は何をしてたか？」だと？

まあ、産まれた瞬間より「この姿」だったからな。

知能も能力も最初から持っていた。

「人間の血を吸わなければ、生きていけない」という本能もだ。
産まれたからには、生き永らえたいだろう？

だから、私も本能に従い、人間を襲い始めた。
そんな事を永遠とやっていた時期もあったよ。
目的も何も無く、ただ「生きるため」にな。

「それでそれで？」か。

それから簡単だろうな。貴様も吸血鬼なら知っているだろう。

「吸血鬼狩り」を。

—
あのひ弱かつ愚鈍かつ低脳な人間が行った、吸血鬼に対しての唯
の愚行。

あれさえ無ければ、今も私は悠々自適に暮らしていたのだが……

まあ、しかし、私に「目的」をくれたのは感謝すべきか。

「人類全てを支配する」という目的をくれた点のみは。

何だと？ 「話が理解できない」だと？ 死ね。死んでしまえ。

馬鹿な貴様に解るように要約してやろう。

私の寛大さに感謝しつつ、崇め奉れ。

- 1、吸血鬼が人間を殺しまくる
- 2、人間が手を取り合って団結、吸血鬼狩りの始まり
- 3、人間より圧倒的に数が少ない吸血鬼たちが次々と殺される
- 4、逃げ惑い、姿を潜め始める吸血鬼
- 5、人間が吸血鬼狩りを一旦、終える
- 6、吸血鬼は人間に怯え、姿を潜めて生活を始めた。

以上だ。

そして、私も人間から隠れて生活をしてきた内の一人だ。
本当に醜く、屈辱に塗れた生活だった。

しかし、しかしだ。

私は、そんな人間を自らの能力で「支配」する事を思いついた。

「全人類を支配し、私の安息の地を作る」

これが、私の「目的」となった。

それからは研究の日々だ。

自らの能力の使い方完全に把握し、改良すら加えてきた。

そんな日々をずっと送り、現在に至る。

これが私の過去の全てだ。

どうだ？ 満足いったか？

何？ 「つまらないです。他の人たちは面白そうなのばかりなのに」だと？

うるさい。死ぬ。死んでしまえ。この屑が。

全く……ド低脳が……

あ？ 「最後に言い忘れた事がある」だと？

何だ。言ってみる。

は？ 「次に赴く地の次の地で貴方は一回、死にます」だと？

……ド低脳が。笑わせてくれる。

死ぬ。貴様の予言など当たるものか。

何？ 「クロウ様も認めてくれた予言です」？

知った事か。

クロウは天才と、この天才である私も認めざるを得ないが、貴様の予言など認める価値にも値せんわ。ボケが。

屑が。

しかしまあ、用心だけはしておくか。

研究の事になると、すぐに熱くなってしまう癖も直さんとなあ……

消えるやメロ、この身が消化浄化除去される！！

魂は「黒坂康介」によりバラバラバラバラとなり、回収不可能！！！！

堕ちた衝撃以外に強く、この身の再生の前に陽光が見に注グ！！！！

我が身体、この地に適応せず、陽光克服ナラズ！！！！

其詰まり即ち即但し夢魔のボろしかたルことなカレ絶命必死はこの世の心理也！！！！

ああああアアアアああああああああアツアアあああ

ああああ！！！！！！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！！

死にたくない死にたくない死にたくない！！！！

人間風情に殺さレタクナイ殺されたくナイ殺サレタクナイ！！！！

うああああああああつあああア……………

アアアアアアア……………

この身、間も無く消え去るであろう。

実に愚か。実に低脳。実に無価値。

私自身が最も愚かであったか。

いや、滑稽滑稽。

さて、死の直前とは異様に冷めるのだな。
いや、勉強になる。

正確には“なった”か……………

しかしだな。私は「黒坂康介」に対してだけは納得出来ない。

アイツは一体何なのか。

それだけは突き止めたかった。

それだけが心残り。

あ、いや。まだあった。

願わくば、黒坂 康介と、奴を取り巻く奴らを皆殺しにしたかっ
た……………

……………意外や意外。

番外編 「これまでの経緯について リミィ・ディジョン」(後書き)

今まで読んで下さった皆様。

ありがとうございます。

これにてこの「クレイジィ」第一部「は終了です。

一応、第三部の予定なのですが……

はてさて書き切れるやら……

また会えましたらお会い致しましょう。

本当にありがとうございます。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7537g/>

クレイじい！

2010年12月2日02時47分発行